

# 第46回 全国公民館研究集会

## 令和6年度 東北地区社会教育研究大会

### 第69回 東北地区公民館大会

### 第54回 青森県社会教育研究大会

令和6年 11月14日(木)・15日(金)

#### 会場

〈全体会〉リンクモア平安閣市民ホール(青森市民ホール)  
(青森市柳川1丁目2-14)

〈分科会〉青森県観光物産館アスパム(青森市安方1丁目1-40)

〈情報交換会〉ウェディングプラザアラスカ 4階ダイヤモンド(青森市新町1丁目11-22)

学びを生かし、つながりをつくり出す社会教育の実践  
～地域コミュニティにおける個人と地域全体のウェルビーイングの向上を目指して～

## 報告書



寒立馬



八戸三社大祭



りんごの花と  
岩木山



特別史跡  
三内丸山遺跡

※画像はすべてイメージです。

# 目 次

## Contents

---

フォトギャラリー .....	1
開催要項 .....	11
大会報告（全体会）	
開会行事 .....	17
記念講演 .....	23
閉会行事 .....	38
大会報告（分科会）	
分科会一覧 .....	41
第1分科会 .....	43
第2分科会 .....	49
第3分科会 .....	55
第4分科会 .....	60
第5分科会 .....	66
アンケートのまとめ .....	72
各種一覧	
大会役員 .....	78
大会実行委員会委員 .....	79
受賞者名簿 .....	80
協賛企業・団体等一覧 .....	82
大会参加者数 .....	83



アトラクション 【五所川原第一高校津軽三味線部「津軽三味線」】



フォトギャラリー



開会行事

開会のことば



東北地区社会教育委員連絡協議会  
会長 白川 喜代美

主催者あいさつ



公益社団法人 全国公民館連合会  
会長 中西 彰



一般社団法人 全国社会教育委員連合  
会長 鈴木 眞理

祝 辞



青森県教育委員会  
教育長 風張 知子

歓迎のことば



青森市  
副市長 赤坂 寛 氏

総合司会



柳澤 ふじこ 氏



表彰



記念講演



質問された方々



閉会行事

次期開催県あいさつ



岩手県社会教育連絡協議会  
会長 大橋 清司

閉会の言葉



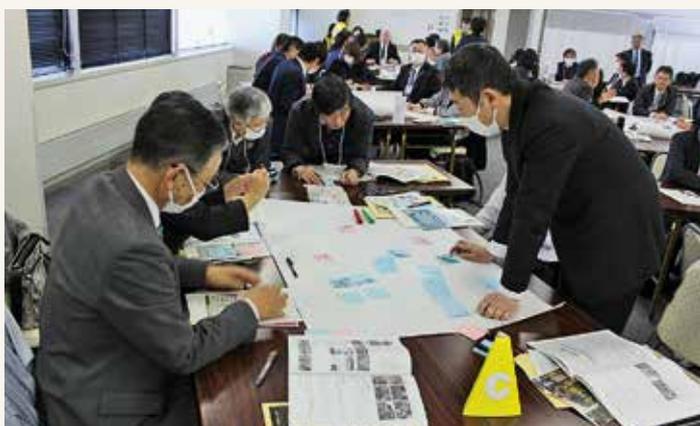
東北地区公民館連絡協議会  
会長 高橋 宣子



第1分科会



第2分科会



第3分科会



第4分科会



第5分科会



## ■開催要項

### 1 研究主題

#### 学びを生かし、つながりをつくり出す社会教育の実践

～地域コミュニティにおける個人と地域全体の

ウェルビーイングの向上を目指して～

### 2 趣 旨

青森県は、三方を海に囲まれ、十和田湖・奥入瀬溪流や世界自然遺産「白神山地」に代表される美しく雄大な自然、世界文化遺産に登録された三内丸山遺跡をはじめとする悠久の歴史・文化、新鮮で郷土色豊かな多彩な食などの魅力に溢れ、青森県教育委員会が目指す「郷土に誇りを持ち、多様性を尊重し、創造力豊かで、新しい時代を主体的に切り拓く人づくり」のための土壌が広がっています。

昨今、人生100年時代、Society5.0<sup>注1</sup>の到来、DX<sup>注2</sup>の急速な進展、新型コロナウイルス感染症への対応など、社会が急速な変化を続けている中、本県の豊かな土壌を生かした「活力ある持続可能な地域づくりのための人づくり」や、社会教育による「学び」を通じて人々の「つながり」や「かかわり」をつくり出し、協力し合える関係を築くことが求められています。

本大会では、人々が、自己の向上を目指して生きがいのある充実した生活を送るとともに、豊かで住みよい地域社会を形成することができるよう、学びを生かし、つながりをつくり出す社会教育の推進に向けて、今後の新たな発展の契機になることを願っています。

注1 仮想空間と現実空間を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会

注2 デジタル技術を浸透させることで人々の生活をより良いものへ変革すること

### 3 期 日

令和6年11月14日（木）～15日（金）

### 4 会 場

〈全体会〉 リンクモア平安閣市民ホール（青森市民ホール）

〈分科会〉 青森県観光物産館アスパム

## 5 参加者

全国及び東北各県の市町村社会教育委員、公民館関係者、生涯学習・社会教育・社会教育関係団体の関係者、学校教育関係者、スポーツ関係者、その他生涯学習・社会教育に関心のある方

## 6 主催

公益社団法人全国公民館連合会、一般社団法人全国社会教育委員連合、  
東北地区社会教育委員連絡協議会、東北地区公民館連絡協議会、  
青森県社会教育委員連絡協議会、青森県公民館連絡協議会、青森県教育委員会、  
青森市教育委員会、八戸市教育委員会

## 7 後援（順不同）

文部科学省、全国公民館振興市町村長連盟、社会教育団体振興協議会、岩手県教育委員会、  
秋田県教育委員会、宮城県教育委員会、山形県教育委員会、福島県教育委員会、青森県、  
青森市、青森県市長会、青森県町村会、東奥日報社、デーリー東北新聞社、  
(株)陸奥新報社、朝日新聞青森総局、毎日新聞社青森支局、産経新聞社青森支局、  
読売新聞東京本社青森支局、(株)時事通信社青森支局、河北新報社、共同通信社青森支局、  
青森放送株式会社、株式会社青森テレビ、青森朝日放送株式会社、NHK青森放送局

# 大会日程・内容

## 1 大会日程

	11月14日 (木)	11月15日 (金)
9:00		受付 9:15~9:30
10:00		分科会 9:30~12:00
11:00		
12:00		
12:00	受付 12:00~13:00	
13:00	アトラクション 13:00~13:30	
14:00	開会行事・表彰 13:30~14:30	
15:00	記念講演 14:30~16:00	
16:00	次期開催県挨拶・閉会行事 16:00~16:30	
17:00	東北六県会議 17:00~17:30	
18:00		
19:00	情報交換会 18:30~20:30	
20:00		
21:00		

## 2 大会内容

11月14日(木)

受付 12:00~13:00

### ア アトラクション ————— 13:00~13:30

学校法人館田学園 五所川原第一高等学校津軽三味線部 「津軽三味線」

### イ 開会行事 ————— 13:30~14:30

司会：柳 澤 ふじこ

- |          |  |           |
|----------|--|-----------|
| ○開会のことば  | 東北地区社会教育委員連絡協議会会長  | 白 川 喜代美   |
| ○国歌斉唱    |  |           |
| ○主催者あいさつ | 公益社団法人全国公民館連合会会長   | 中 西 彰     |
|          | 一般社団法人全国社会教育委員連合会会長  | 鈴 木 眞 理   |
| ○来賓祝辞    | 青森県教育委員会教育長  | 風 張 知 子 氏 |
| ○歓迎のことば  | 青森市長   | 西 秀 記 氏   |
| ○来賓紹介    |  |           |
| ○表彰      | 公益財団法人全国公民館連合会表彰<br>東北地区公民館連絡協議会功労者表彰<br>東北地区社会教育委員連絡協議会表彰<br>青森県社会教育委員連絡協議会表彰 |           |

### ウ 記念講演 ————— 14:30~16:00

演 題 「笑って走れば福来たる ～私がスポーツから得た学びとつながり～」

講 師 ワコール陸上競技部アドバイザー 福 士 加代子 氏

### エ 閉会行事 ————— 16:00~16:30

- |            |                |         |
|------------|----------------|---------|
| ○次期開催県あいさつ | 岩手県社会教育連絡協議会会長 | 大 橋 清 司 |
| ○閉会のことば    | 東北地区公民館連絡協議会会長 | 高 橋 宣 子 |

11月15日（金）分科会

受付 9：15～9：30

分 科 会 \_\_\_\_\_ 9：30～12：00

分 科 会	テ ー マ	会 場
第1分科会	豊かな学習機会に対応する社会教育の推進	アスパム 4階「十和田」
第2分科会	社会教育施設の機能の充実と活用	アスパム 6階「八甲田」
第3分科会	健康や感動を生み出すスポーツ振興の推進	アスパム 6階「岩木」
第4分科会	郷土芸能の継承と文化活動の推進	アスパム 5階「白鳥」
第5分科会	家庭・学校・地域の連携と協働の在り方	アスパム 5階「あすなろ」

### 学校法人舘田学園 五所川原第一高等学校 「津軽三味線」



学校法人舘田学園五所川原第一高等学校は、津軽平野の中央に位置する五所川原市にある全校生徒290名の私立の普通科高校です。「明朗 協調 進取」の校訓の下、生徒自らが人生を切り拓けるよう「情報ビジネスコース、進学コース、特別進学コース」の3つのコースを設け、進学や資格取得、そして課外活動まで、幅広い活動を展開しています。私たち津軽三味線部は、韓国修学旅行での演奏が契機となり、今年で創部22年目を迎えます。津軽富士「岩木山」を望み、みちのくの夜を照らす「立佞武多」の町である私たちの故郷には、日本を代表する郷土楽器「津軽三味線」があります。雪が吹き荒れ、寒さがしびれる青森の地で、遠くまで力強い音色を届けようと太棹や犬皮を用いた津軽三味線は、ジャズのようにアドリブを効かせた演奏方法と叩き奏法が特徴です。3つの弦を巧みに操り、バチを用いて独特なリズムや間合いを創り出しながら、「合奏」という手法で感動を共有します。

私たちは、津軽を代表する五大民謡の中から特に津軽じょんから節を基盤とした創作曲など、温故知新の精神で郷土芸能を伝承することを目的としています。今年の演目は「風～津軽の記憶～」と題し、主に古くから津軽に伝わる民謡を基盤とした計10曲で構成されています。津軽の四季に吹く風をイメージし、春は「薫風」、夏は「熱風」、秋は「律の調べ」、冬は「吹雪」を想い浮かべながら、切なくも力強い津軽の記憶を表現しています。私たちが津軽三味線に巡り合えた喜び、そして津軽三味線が伝承されていくことを願い、一生懸命演奏致します。どうぞお楽しみください。

## ■大会報告（全体会）

### 開会行事

#### 開会の言葉



東北地区社会教育委員連絡協議会  
会長 白川 喜代美

皆様には、この大会にご出席いただき、また、ご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。今日、明日、2日間ここ青森市において、県内外の社会教育関係者が一堂に会し、情報交換や親睦を深めることは大変意義深いことであると思います。

本研究大会の研究主題は、「学びを生かし、つながりをつくり出す社会教育の実践」であります。またテーマは、「地域コミュニティにおける個人と地域全体のウェルビーイングの向上を目指して」であります。この大会を通して、社会教育の発展の一助になれば、ありがたいと思っております。

それでは、ただいまから第46回全国公民館研究集会・令和6年度東北地区社会教育研究大会・第69回東北地区公民館大会・第54回青森県社会教育研究大会を開催いたします。

#### 主催者あいさつ



公益社団法人全国公民館連合会  
会長 中西 彰

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました、全国公民館連合会の中西です。全国、そして東北地区、そして何よりも青森県の公民館関係者から、さらに社会教育委員の皆様、一堂に会してのこの大会の主催者の一員としてご挨拶を申し上げたいと思います。

小春日和という、本当に耳に心地よい言葉の日和になりました。何か少し昔の話になりますけれども、縁側で子どもがお母さんの肩を叩いている姿が思い浮かぶようなそんな日和でございます。

全国公民館研究集会は、昨年、4年ぶりに7つのブロック全てで対面による通常の開催ができました。今年もそのつもりで計画しておりましたが、皆さんご承知のとおり、今年の元旦、能登半島地震という大きな地震がございました。ちょうど東海北陸大会が石川県の開催予定だったものですから、これは開催できないということで見送ることになりました。

また、今年の最初に開催する予定でした九州大会は大分県が当番だったのですが、月末、台風10号が直撃いたしまして、これも直前になって開催を見送るということになって、残念ながら今年は5ヶ所での開催、今回が締めくくりということになります。

公民館は戦後まもなく設立され、少し間を置き、高度経済成長で国全体の勢いがついた時期がございました。それと歩調を合わせるように公民館活動もすごく充実発展した時期がございましたけれども、その経済発展が少し陰りを見始めるのと、ちょうどまた同じように、人口減少とかその中でも特に少子高齢化という形のいびつな人口減少、そしてそれと関連しながら自治体の合併がございまして、公民館は数の減少あるいは組織運営の難しさに直面する時期になりました。

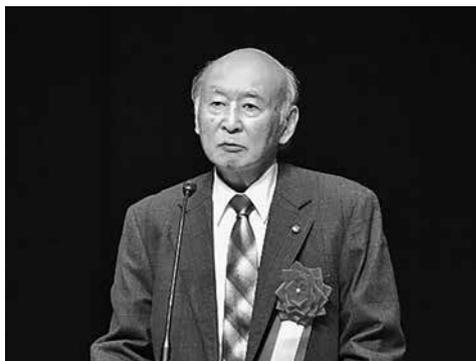
そんな時期に、私どもの諸先輩方はいろいろ工夫しながら乗り越えてきたわけですがけれども、特にこの4年近くの間、コロナ禍という非常に未曾有の災害に見舞われました。なかなか対面での活動がまならぬという公民館活動にとっては致命的な問題でございました。その時期にそれではいけないだろうということで、対面を補う形で、デジタル技術を活用したオンラインとかSNSの広報とか、そのような技術がずいぶん進んだように思っております。今、コロナというものが収まりかけた時期になりまして、公民館活動も元のような形で復活しつつありますけれども、この大事な公民館活動が本来の姿を取り戻したと、コロナのときに頑張った技術を、忘れてはいけないと思っております。日程的になかなか合わない人へ送り届ける手段であったり、広報についてもいろいろな形で若い人をターゲットにした方法も生まれてきたりしておりますので、これからもコロナのときに頑張った技術を大いに活用していただきたいと思っておりますので、これは社会教育委員の皆さん

んにつきましても同じように言えるんじゃないかと思っております。

そういうふうに関連した技術を開発した方々のものだけにせず、こうした大会とか、あるいはいろんな場面で、お互いにそういう知見を交換するというか、そういうことをしながら公民館活動、あるいは社会教育活動の高みを目指すことが大事なのではないかなと思っております。青森の大会がそういった一つのきっかけになればと、こんなふうにいるところでもありますので、どうぞよろしく願いいたします。

結びになりますけれども、お忙しい中おいていただいたご来賓の方々を初め、今回、直接の準備にあたっていただいた青森県の白川委員長さん、実行委員の皆さんのご苦勞に感謝をしながら、開会のご挨拶ということにさせていただきます。2日間どうぞよろしく願いいたします。

## 主催者あいさつ



### 一般社団法人全国社会教育委員連合 会長 鈴木 眞 理

会場の皆さん、ようこそおいでいただきました。ありがとうございます。

先ほど、全国公民館連合会会長さんのお話で、今年ブロック大会を5ヶ所で開催したということでしたが、全国社会教育委員連合では幸いなことに、全てのブロックで大会が開催できる運びになっております。どこの団体も開催できるかどうかということを経験して危ううんでいて、そしてそれができたということになって、だんだん盛り上がってきた、昔に戻ってきたような感じもいたします。こういう大会を開催して、ご来賓の方々にもわざわざおいでいただき、ありがとうございます。さらに盛り上がりを増すようなことが、このところできるようになってきているのだと思います。

実は中西会長さんとは1ヶ月ぐらい前に富山県のこのような大会で一緒させていただきました。様々なことができるようになってきて、ますます我々、期待をすると周囲の方々が言うてくださるんですが、本当に期待をされなければいけないんだという考えを強くしております。

話はちょっと違うのですが、先週、関西地区に個人経営でやっているおもちゃ関係の博

物館の50周年の記念イベントに行ってきました。全く行政からの支援は出ていません。感謝状か何かはいただいているようですが、その程度です。自分のお金で50年近くやってきているのだということです。学校教育と違うわけですから、そういうことが勝手にできるわけです。

その博物館を作った人は今でもその経営の中心にいて85歳を過ぎている人なのですが、元々は電車の運転手さんだった人で、奥さんがお金持ちだったこともあって、うまい表現が見つかりませんが、自分で世界的にも名が通るような博物館を作って活動しているということでした。何かで表彰されたいとか、何かの称号がもらえるからとか、そういう目的で活動しているわけではありません。遊ぶためのおもちゃを何としても取っておいて伝統を崩してはいけない、取っておきたい、その一心で、自分の土地を使って、そのような活動をしている方でした。個人の力でもできるのです。私はわざと茶化して、独りよがりの使命感でやっているのだと人を馬鹿にするような言葉で言っているのですが、それをいたく気に入ってくださって、他の人にも、その通りだと言ってくさっています。

そういうものが根底にある。それが社会教育なのであって、制度ができてからやるという話ではなく、これをやらなければいけない、そういうような思いから始まる。これが社会教育の領域であります。

公民館も、社会教育の様々な事業もそういうような、やむにやまれぬ思いみたいなものから始まっているわけです。しかし、それを一度行政の政策としてしまうと、さあ、どうなのでしょう？そこに生き生きとした力が感じられなくなるようなことにもなりかねません。そこを、我々はかなり意識しておかなければいけないと思います。

いや、もちろん行政がきちんとした支援を

してくれる。それは法律等に照らしても当たり前のことでもあります。行政の支援はいろいろな、全く独力でやればよいということではなく、いろいろなことが行政頼みになるというのもどうかと思っています。その根底にあるのがボランティアな力、それを社会教育、公民館の活動も含めて、社会教育の方でまた力強く進めていかなければいけないんだということを思い知らされました。

いろいろなことがある世の中で先行きがどうなるかわからず、明日どうなるかもわからない。いろいろな災害もある。でも、そういうときに、気持ちの底にあるような活力、それがものを言うてくるのです。

それに備えるために、いろいろなところでいろいろな人たちと連携をとりながら、あるいはいろいろな学習、学びを通じて、さらに我々が持っている力を貯めていくことが必要なのだと思っています。

どうぞ今日、次の福士さんの話と明日の分科会で、また様々なヒントを得て、日常的な活動にお役立てください。お集まりいただきありがとうございました。

## 祝 辞



青森県教育委員会

教育長 風 張 知 子 氏

ただいまご紹介いただきました、青森県教育委員会教育長の風張でございます。本日は東北各地から、ようこそ、青森県にお越しくださいましてありがとうございます。それでは祝辞を申し上げます。

本日、ここ青森市において、東北各県の社会教育委員や公民館関係者を初めとする社会教育関係者が多数参加され、第46回全国公民館研究集会、令和6年度東北地区社会教育研究大会、第69回東北地区公民館大会、第54回青森県社会教育研究大会が盛大に開催されますことを心からお喜び申し上げます。

また、ご参会の皆様におかれましては、日頃から各地域における社会教育の振興や公民館活動の充実に努められ、地域社会の発展のため多大なるご尽力をいただいておりますことに深く感謝を申し上げます。

また、この度、表彰を受けられます皆様に心からお祝いを申し上げます。おめでとうございます。

さて、少子高齢化と人口減少が進む一方、社会経済のグローバル化が進展する情勢において、教育に対する期待や関心はますます高まっています。

国の第4期教育振興基本計画では、将来の

予測困難な時代において、未来に向けて持続可能な社会を維持発展させていく人材を育成するとともに、多様な個人それぞれが幸せ生きがいを感じ、地域や社会も幸せや豊かさを感じられるよう、教育を通じて、ウェルビーイングの向上を図っていくことが求められています。

青森県では、こどもまんなか青森を施策の中心に据え、様々な取り組みをしています。青森県教育施策の大綱でも、こどもまんなかを掲げておりますが、未来を担うこどもたちが、たくましく生き抜いていくことは、こどもたちの幸せだけではなく、私たち大人の幸せでもあると思います。そしてこどもたちには、郷土を知り、好きになり、誇りに思ってもらいたいと思っています。それは青森県に限らず、どこで生まれたこどもたちにとっても生まれた町や育った町を誇りに思うことは、自己肯定に繋がるまずは基本のとても大事なことです。

そのためには、周りにいる大人がその地域を誇りに思い、日常的に伝えることが大事だと思っていますし、その大人たちが常に学び、生き生きと暮らしていることが、とても大事なことだと思っています。その要になるのが、社会教育であり、公民館活動だと思っています。

青森県教育振興基本計画の中でも、家庭・地域の連携・協働の推進、人生100年時代の学び直し、生涯学習の推進等に取り組むことにしていますが、まさに本日お集まりの皆様が日ごろ行ってくださっていらっしゃるものがその礎になるものと思っています。

このような中、本大会において「学びを生かし、つながりをつくり出す社会教育の実践～地域コミュニティにおける個人と地域全体のウェルビーイングの向上を目指して～」を研究主題として活発な研究協議がなされることはとても意義深いものであります。

参加された皆様におかれましては、本大会の成果を踏まえ、それぞれの地域においてますますご活躍されますことをご期待申し上げます。

結びに、本大会の開催にあたりご尽力いただきました関係各位に感謝を申し上げますとともに、本日ご参会の皆様方の益々のご健勝とご活躍を祈念申し上げ、お祝いの言葉いたします。

## 歓迎のことば



青森市長

西 秀 記 氏

皆様、ようこそ、ここ青森市にお越しくださいました。私は青森市の副市長の赤坂と申します。

本日、西市長でございますが公務出張中につきまして、こちらの方に駆けつけることができませんでした。

私、メッセージを預かって参りましたので、大変僭越ではございますが、代読をさせていただきます。

第46回全国公民館研究集会、令和6年度東北地区社会教育研究大会、第69回東北地区公民館大会、第54回青森県社会教育研究大会が東北ブロックを中心に、全国各地から大勢の皆様のご参加のもと、ここ青森市を会場として開催されますことは誠に喜ばしく、市民を代表して心から歓迎申し上げます。

「学びを生かし、つながりを作り出す社会教育の実践」を研究主題に福士加代子様による記念講演や、5つのテーマについての分科会が行われるなど、本大会が開催されますことは、社会教育の推進にとって、誠に意義深く、開催にご尽力いただきました関係者の皆様に深く敬意を表する次第であります。

皆様方におかれましては、本大会の開催を契機に、地域活力の向上に向け、より多くの

交流や、情報交換を進めていただきますよう、ご期待申し上げます。

さて、人口減少、少子高齢化の進展により、人と人との繋がり希薄化や、地域コミュニティ意識の低下が進む現代社会において、社会教育は、市民相互の繋がりに加え、地域の持続的な発展を支えることが求められており、今回の分科会での5つのテーマにつきましては、いずれもこれからの社会教育にとって、大変重要な内容であると認識しております。

本市におきましても、教育委員会、小中学校校長会、PTA連合会が連携し、学校、家庭、地域が一体となった教育力の向上を目指し、教職員、PTA、保護者を一堂に会した研修講座を開催するなど、これからの社会教育に必要な取り組みを進めているところであります。本市の取り組みが、このたびの研究大会において参考になれば幸いに存じます。

また、本市には、八甲田に代表される美しい自然、リンゴ、ホタテなどの優れた食材、三内丸山遺跡や小牧野遺跡など世界文化遺産、市内に点在する豊かな温泉そして世界に誇るねぶた祭りなど、魅力的で豊富な観光資源がございます。

秋真っ只中の、この機会にぜひ青森の魅力をご堪能いただきたいと存じます。

結びに、本大会がお集まりの皆様にとりまして、実りの多い有意義な研究大会となりますこと、並びに、皆様のご健勝と、益々のご活躍を祈念いたしまして、歓迎の挨拶といたします。

令和6年11月14日、青森市長西秀記、代読でございます。

本日は誠におめでとうございます。

## 笑って走れば福来たる

～私がスポーツから得た学びとつながり～

講師 ワコール女子陸上競技部アドバイザー 福士 加代子 氏

柳澤 皆様、お待たせをいたしました。この時間は福士加代子さんのトークショーを行います。引き続きラジオパーソナリティの柳澤ふじこがお相手を務めさせていただきます。

福士さんのことを皆さんよくご存知だとは思いますが、福士さんのプロフィールは大会冊子の12ページにしっかりと掲載されています。

現在は、ワコール女子陸上競技部のアドバイザーをされていらっしゃるということでございまして、笑福駅伝とか、いろんなイベントも主催されていらっしゃると思います。今日は地域との繋がりという社会教育がテーマの大会になっています。福士さんは板柳町の出身ですが、皆さんにご紹介する時は、どんな町とご紹介していますか。

福士 りんごの町、りんごの里、そして私は今、板柳町のりんご大使をやっています。平野で田んぼとりんごの木に囲まれた中で育て、いつも板柳町の駅に向かうときは、岩木山が見えるという、すごく綺麗な風景の町並みです。基本、平野育ちなので、坂は駄目です。下りはいけるのですが、坂はやりませんとずっと言っていました。

柳澤 自然が豊かな環境の中で育て、子ども時代の福士さんは、どんなお子さんだったのですか。

福士 自分では記憶があんまりないんですが、お父さんとお母さんが床屋をしていまし

て、3人兄弟の一番下に生まれて一番おとなしかったらしいです。一番おとなしくて、お父さんたちが仕事をしているところのソファにずっと座っていたらしいです。

あと小学校時代は、学校に行って、校庭を1～2周走っていました。雨が降ったら学校の中で縄跳びやったり、跳び箱やったり、雪だったら歩くスキーしたりとか、必ず、まずスポーツしてから授業に入って、掃除してみたいな、掃除して授業かな。そのルーティンは1年生から6年生までずっとやっていたので何かスポーツって遊ぶ感覚でしたね。

柳澤 もう知らず知らずのうちに？

福士 そうですね、なんか鍛えられてた、そんな感じです。なんか一輪車とかも取り合いになるので、朝早くにみんなで行って体育館でこぞって遊んで、とにかく遊び時間は動き回っていたっていう感じですかね。

柳澤 何気なく遊んでいたことが。

福士 はい。足腰を強くしてくれたと思いますね。川があるので、その川をめぐって犬の散歩をしていました。犬が走れば私も走るし、犬が止まれば自分も止まるっていう、犬優位な散歩をしていました。それと多分、成長とともに犬よりも自分の体力が強くなって、犬がまいったというまで帰ってこなかったの、そのおかげでちょっとずつ良くなってきたかな、体力的にも。

柳澤 でも、小さな頃はそんなに足が速いお

子さんというわけではなかった。

**福士** そうですね。多分、運動会とか町内会レベルで1番とか2番になることはありましたけど、それでも同級生が14人とかしかいないんで、14人中の1番なんてたいしたことないでしょ。先頭に出るとか一等賞になるのは好きでしたけど、そんな足が速いと思ったことはあまりないですね。

**柳澤** 今、町内会という話が出ましたけど、町内の皆さんは全員顔見知りみたいな感じなのですか。

**福士** うちが床屋なので、みんな集まってくるというのもあって、情報網は、床屋にあるというのは、海外でもよく聞くのですが、海外に行っても、床屋が情報をもっている方が結構多く、なので、福士理容店は軽くカフェにもなってますね。

**柳澤** 地域の中で育ってきて、地元のお祭りとか郷土芸能とかもしたのですか。

**福士** りんご火祭り、ねぶたにみんなで行ったり、子ども会とかもあったのでキャンプしたり、遠出をできなくなったときには、学校でキャンプをやりました。結局、みんな遊ぶことは自分で考えていました。誰かに教えられて、これやれとかというよりは、遊び道具を自分たちで作って遊んでいました。それが、全部勝手にスポーツみたいな感じになっていました。なんか、知らず知らずに交流もしていて体を動かしています。

**柳澤** そうですね。笑顔が生まれる場が作られていたっていう感じですね。

**福士** 良い機会を、地域の皆さんが作ってくれていたなと思います。

**柳澤** ちょっと今日のテーマっぽい話をしてみたいのですけれども、小学校中学校でやっていたのは陸上ではないのですよね？

**福士** 陸上は運動会レベルでしかやってないですね。小学校の時はソフトボールもやっていましたけど、陸上もちょっとやったり、卓

球もやったり、水泳もやったりという形で、とにかく小さな学校だったので、女子はソフトボール、男子は野球。ソフトボールの期間が終わったら、みんなで水泳にチャレンジするみたいな。公民館もあったのでみんな野外のプールで水泳の練習をしていました。板柳町は、本当にスポーツマンを輩出してるというか、高見盛も追風海もそうですし、そしてスーパーランナー福士加代子さんもいるし、地域で遊ぶとか学校で遊ぶとか、知らず知らずに体力つけていくみたいなのが、もしかしたら。楽しかったね、本当に。

**柳澤** 楽しいでしょうし、だからアスリートが生まれるのかな、なんてことも今、お話を聞いて思いました。

**福士** とにかく楽しんでやることを教えられた感じはあります。遊び感覚があり、苦しいというのは本当にはないです。ほんのちょっとだけ最後の最後の勝負で苦しかったぐらいはありますが、でも、結局それも、その後みんなでまたワーッと遊んだりするので、ちょっと面白かったかなというのに変換される。苦しんだのは高校卒業して、実業団入ってからです。それ、ちょっと遊びじゃないんだよと、ピリッとしたものを教えてもらって。

**柳澤** そうですね、そういったお話も、徐々に伺っていこうと思います。

**福士** はい、ソフトボールを小中でやってキャッチャー、キャプテンもやってね。それも、ジャンケンで負けただけなのですけどね。

**柳澤** でもソフトボールをやったことで何か学んだっていうのは？

**福士** ソフトボールではやっぱり上下関係を学びました。兄ちゃんとかのレベルではなく、先輩っていうのを初めてそこで知って、挨拶したりとか、その上下関係はやっぱり知っておいてよかったなという経験にはなりました。

柳澤 なるほど。

福士 地元にて同級生だけで過ごしていると、やっぱりわからなかったの。あと、よくしてくれるおじちゃんたちしかいないので、かわいい、かわいいしかしてもらえなかった人が、先輩たちにひどく怒られるのはちょっといい勉強になったかなというのがあります。時間を守るとか。社会人として、大切な最低限のルールは、そこで学びました。

柳澤 小中はソフトボールをして、高校進学ってなったときに、地元の高校には？

福士 そう、行かなかった。地元の人たちは、すごく温かくて良かったんですけど、なんかね、自分を変えたかった。新しいキャラを自分で作りたと思ってしまったんですよ。今までいたちょっとおとなしめの福士加代子さんも、ちょっと角度を変えれば違うところもあるのかなというのを、自分が見たくなって、あえて地元じゃなくて、隣の五所川原というところに電車を使って通学することを選びました。

柳澤 そうか、ちょっと変わってみたい、変化が欲しかった。

福士 だから普通科も嫌だったの、工業高校に行くという、とにかく行きたかったみたいな、違うことをしたかったというだけが入っただけです。それが運命を変えてしまった感じはあるんですけど。

柳澤 まさにそこに行ったから、現在の福士加代子さんがいる感じですね。

福士 そうですよ。ここで爆発しちゃった感じがあった。何故か、図太くなっちゃった。高校に行ってから自分の思いを言わないことの方が、恥ずかしいことだというのに気づいて、人に何かやってほしいとか、自分がやりたいことがあっても、自分が待っているだけじゃ駄目だなということは高校で教えられた感じはあります。

柳澤 それは、陸上と出会ったから。

福士 そうですね。陸上はちょっと個人種目みたいな感じはあるじゃないですか。チーム活動もあるんですけども、自分で頑張るとか一歩前に出るということは、自分の殻を破るのと似ているのかなというのもある。

あとは先輩後輩の関係が変わりまして、ソフトボールは先輩がボールを打つとすると、先輩の打ちやすいところに投げてあげるとか、先輩の取りやすいところに渡してあげるみたいなのが後輩としての仕事でして、それと陸上部の関係はちょっと違って、先輩の前に出なきゃいけないんですよ。陸上って、私、長距離なんですけど、例えば70秒で1周行くようになったら、引っ張られている方にくっつく方が楽なんですよ。その役目を誰がやるかということ、後輩がやるんですよ。

柳澤 そうなんですね。

福士 だから、中学校までは先輩の前に出ることとか、先輩が絶対みたいな感じがあったんですけど、高校になって陸上部になってからは先輩の前に出なさいと言われる指導だったんです。

柳澤 それはもう正反対だ。

福士 そういう感じで、また先輩と後輩のあり方も、前に出てくれたからありがたいってなるんですよ。引っ張ってくれてありがたい、みたいな形になるので、どちらかといえば平和。

柳澤 陸上は平和。

福士 はい。陸上は誰かと戦った後にもう1回仲が良くなるみたいな感じはありますね。こういう世界も面白いなと思いました。人に喜ばれる世界があるんだって、自分の中で感覚が変わったのはあります。自分の中でそれが面白かった。

柳澤 でもその面白いという感覚が、自分を伸ばしてくれた、みたいなところもありますね。

福士 なので、そこから自分がこうやって言ってもいいんだということをいっぱい言っ

てみたら、意外とみんなが聞いてくれて、こんな世界でいいんだと思ったら、もっと自分が殻を破って、もっと素でいられるようになったというか。なので逆に私は結構、根は明るかったんだなということに気づいて。

**柳澤** そうですね、それも皆さん感じていらっしゃる。

**福士** 根暗かなと思ったんですけど、それはちょっと作っていたかもしれない。会話する相手は犬ぐらいでしたから、いろいろなところを走り回って、空見たり山見たりして、自然と犬に育てられた感じがあります。

**柳澤** でも陸上をやって、ご自身のタイムとか、どんどん伸びていくとか、何か手応えはありましたか。

**福士** 手応えはね、先頭に出てみるというのが自分の中では掴んだものですかね。タイムは気にしないですね。一等賞かビリかぐらいしか覚えてないです。前に出れば1位。とにかく先頭集団に行って、ちょっとでも前に出るみたいな、それがのちのち自分のパフォーマンスを上げていきました。いや、何回も何回も負けてるんですよ。ここで出ちゃ駄目だよというときに当たりするので、でも見ていたら面白いじゃないですか、犬の散歩と一緒に、出続けていけばそのうち体力が出てきて、勝てちゃうのよ。そう、だから一等賞になる気持ちはちょっと覚えたかもしれないですね。タイムとかよりは一等賞というのは面白いなっていうのはありました。

**柳澤** 陸上部に入部してからは本当に素敵な仲間や恩師、繋がりというものもあったと思うんですけど。

**福士** はい。本当にその仲間に恵まれました。今も付き合いが長いのは高校で3年間付き合ったメンバーです。今も二、三十年ぶりぐらいの人たちとかでもずっと連絡を取ります。

**柳澤** 最高ですね。

**福士** あとは実業団行ったときも、大きい大会行ったときや迷ったときとかは、自分のコーチ、監督もいるんですけど、まず先に恩師の安田先生に相談してました。

**柳澤** 安田先生がきっと、福士加代子さんの人生のキーマンになっているかと思うんですけど、どんな先生なんですか。

**福士** 私らと会う前は木造高校にいらっしゃって、そこでは有名な陸上部を強くする鬼の安田と言われた怖い先生でした。私たちの工業高校に来たときは僕の安田に変わったらしいです。先生に聞いたら木造高校時代はとにかく勝たせてあげなきゃいけないし、勝たせたいという自分もあったので、とにかく頑張らせてやらせていたと。勝つために厳しい練習をして実績を残すのもいいんですけども、そのときに疲れちゃったのかな。

五所川原工業高校の陸上部ってというのが、とにかく賑やかで明るくて笑っているっていうイメージがすごくあって、安田先生がこの工業高校に来て、この部員たちを見たときにこの子たちの笑顔を壊しちゃいけないなと思ったらしく、そしたらちょっと楽しくやらせようというのにチェンジしたらしいです。成績も全国一とかではないですけども、県では1番2番になるぐらいの成績を残していたので、うちらはみんな、「すごいね、安田先生。」と言っているけど、木造高時代とか前の話を聞くと、「あんなに優しい先生は見たことがない。」みたいに言われたことはあります。とにかく私も楽しく走りなさいとか、苦しいときにこそ笑顔で走ってみたら、と教えられた感じはあります。

**柳澤** 加代子スマイルはそのときですか。

**福士** 出たのかな。とにかくふざけていた笑いですよ。苦しい顔をして苦しそうに終わるのは普通じゃん。ちょっと笑ってたりすると意外と見ている方はちょっと和やかに面白いと思うんだけどなって、冗談で話してまし

た。多分頑張りすぎると肩が上がっちゃうタイプなんですよ。力が入っちゃうタイプなので、笑っているぐらいの方がその後スピードが出て勝っちゃったんですよ。なんか和やかというか穏やかな顔にした方が、結構私はリラックスできてたので、これはいい走りだ、スマイル走りはいい走りだな、みたいなのは自分の中ではあります。

柳澤 安田先生の指導がぴったりだった。

福士 あとはチームメイトに喜んでもらいたいというのが事実ですね。長いじゃん、3000mとか1500mとか7周も見られるんだよ。「今から前行くね。」みたいなのも、ちょっと指差して遊んでみたりして、なんか他からしたら「何あんなふざけてんの。」っていうような人もいたとは思いますが、そんなの一切関係なく私が楽しければいいっていう感じでやってたので。

柳澤 うわーそんなマインドめちゃくちゃ大事だなって、思います。それを許してくれたのが五所川原工業高校の安田先生であり、そのチームメイトだった。「いいじゃん、やってこい。」みたいな、そういうノリ。

福士 うん、ノリでやってくれた学校だったので。みんなが喜んでくれるとか、みんなと走りたいとか、楽しいっていう気持ちが先行して。

柳澤 そうですね。

福士 陸上の大会っていろんなところに行けるんですけど、それも、ちょっと遠くになると泊まれるねっていう話になって、泊まるためだけに行くみたいな。

県大会のときも前の日に遠足みたいに、みんなでしょっぱい担当と甘い担当決めて、500円以内でお菓子を買って行って、安田先生が運転するマイクロバスの後ろを占領してお菓子パーティーみたいなのはしていましたね。

柳澤 へえ。遠足ですね。

福士 そう陸上部なんですけど、陸上の大会は遠足気分で作っていたっていう感じですね。それでみんなで楽しかったねっていう思い出になるので、みんなで悲しんだり、喜んだりとかするのがなんか面白いなと思って。でもやっぱり強い選手もたくさんいましたよ。全部の種目があったので。

とにかく陸上の魅力はそこで初めて知りました。跳ぶ、投げる、走る、あと人間業でこんなこともできるのか！というのを見たり、そういうのを目の当たりにして、応援もできて楽しいというので、全部陸上楽しいというのはそこで初めて思ったかもしれないですね。

柳澤 競技の中でも短距離じゃなくて、長距離を選んだのはやっぱりその犬のおかげですよ。ワンちゃんが導いてくれた長距離。

福士 そうです。だからワンちゃんと一緒に強くなっていったら、なんかワンちゃんよりも体力がついてきて、自然と短距離が遅くなっちゃったんですよ。

柳澤 メキメキと頭角を現して、卒業する頃には注目浴びたのですよね。

福士 でも、あれも運です。私が実業団に行きたいと言っていたわけじゃなくて。たまたま青森山田高校の選手をスカウトしに来ていた人が、私にも目をつけてくれたので、そのスカウトマンがワコールの方だったのです。

柳澤 運命だ。

福士 そう。なんだかその子はヘラヘラして走っていたんですけども、勝っちゃったんで、青森山田高校に。

柳澤 それがすごいですけど。

福士 勝っちゃったから、あいつは誰だって話になっちゃって、五所川原工業高校に来てくれることになって、そこから何回か全国でやるような合宿にも参加することができて、面白いやつがいるということが、皆さんの目にとまったみたいです。

柳澤 いや、すごいですね。あの有名な監督からも。

福士 そうですね。今は亡き小出さんとかも話しかけてくれたんですけど、私がそもそも陸上に興味がなくて高橋尚子さんすら知らなかったの、小出義雄さんも知らなくて、なんだ、この髭のおじちゃんは何となく感じでした。実業団というものがよくわからないし、走ってお金が稼げるという意味がわからなくて、四六時中走ってなきゃいけないのか、やられるかそんなことって思っちゃったね。プロ野球ならまだしも、実業団ってなんだよ、取っ掛かりがそれだったので。

柳澤 でも自分の高校卒業後の選択肢が増えたわけですよね。

福士 何より私が選んだのは理容業か就職です。就職が大事だったのですよ、私の中で。なんかね運命のいたずらがあって、インターハイと理容の通信教育の試験がかぶっちゃって、どっちをとりますかってなって、インターハイに行っちゃったんです。工業高校はやっぱり選択肢がいっぱい。就職率が高かったの、そこで就職しようと思っていて、山崎製パンかワコールに行こうと思っていました。パンが好きだったので、ただそれだけで山崎製パンかワコールかのどっちかでした。

柳澤 それでワコールを選んだ。その理由は。

福士 はい、ワコールが下着会社で、関西だったんですよ。私どうしても関西に行きたいっていう憧れがあって、大阪に住みたかった。大阪から近い県は、と言ったときに山崎製パンかワコールが残って、あとは下着会社でもあるし、友達を減らすのが嫌だったから。友達が少なくなるなと思ったときに、ワコールさんが「社販というのが年に2回ありまして、そのときにはパンツやら下着、パジャマはすごく安く買えますので、そのとき

に友達とかに送っていただいたら、友達はすごく喜ぶと思いますよ。」、みたいなことも言っていただきまして、「なるほど。」と思って。「親も喜びます。」と、もう最後の殺し文句でありまして。それで行くことを決めたというのはありますね。「働ける場所で1年間やってみて、多分花も咲かないし、無理だと思ったら私は捨てられるのですか。」と聞いたら、「そのまま正社員として残します。」というのがあったので、これはもう「ワコールに行く。」と言って決めたんです。だから、オリンピックに行きたいとか、そういう華やかな話ではないです。とにかく「パンツがもらえてよし、大阪だ、関西に近いぞ、ワコール。」というので入ったのがきっかけです。就職いただきました、という感じですね。

柳澤 でもワコールに入ってから、その勢いってすごかったですよね。

福士 そう。でも、良くなってからの勢いなので、やっぱり最初の半年過ぎぐらいまでは故障でした。故障というか、ついていけないので、そんな生半可でやってた人たちが急に練習量が100倍近く増えたのかな。

柳澤 それはだいぶ違いますね。

福士 そう。なので一応メニューは減らしてはいたんですけども、全然ついていけないし、体もできてないのでいろんな意味で落ち込んだりして駄目だったんですけども、実業団というのは監督、コーチ以外にトレーナー、メンタルのトレーナー、あと体を見てくれるトレーナー、ランニングコーチ、医療系のコーチという何かスペシャルサポーターみたいな方がとにかく5、6人はいるんですよ、チームに。なので、まずは土台を作ろうという話で水泳から入ったんですよ。水泳とバイクで調整してもらったんですよ。陸に上がるまで、水中でトレーニングをもらって。ワコールさんがそのときに、結構いい機械がありまして、鮭の産卵みたいな感じ

で逆流に向かって泳ぐという、そういう機械があったんですよ。「自分は産卵してる。」と思いながらやってましたけど、とにかく施設が良かったですね。施設とトレーナー、監督とかコーチ陣の陣営がすごく良かったので、そのおかげで爆発的というかそのまま伸びが止まらないまま行ったっていうのもあります。

**柳澤** 1人の選手のために多くの方が関わっていますね。

**福士** ちょうどチームだったのも良かったですよ。ワコールがそのときは8人から15人ぐらいのチームでやっていたので。その中でグループ分けがあって、それが私にはちょうど良かったなと思って。1人でとにかくやれない人なので、誰かと一緒じゃないとすぐさぼるんで。そんなときはできる先輩がそばについてくれました。

いやもうね、鮭の遡上のトレーニングをしつつ。

**柳澤** どんどんもう楽に走れるとか、自分の走り方みたいなものがわかってきた。

**福士** ちょっとずつですかね。あと短距離のコーチがいたので。だから自分が何も知らない状態で入ってるので、スポンジのように全部吸収して行って、自分に合うか合わないかってわからないけども、とにかく全部やってみるっていう形でやっていたら、なんか上手に伸びていたのもあります。

**柳澤** いや本当ですよ、もう3000mも5000mも日本記録で。

**福士** でも、まず皆さんが初心者というか、まだ誰も有名選手を作ったことがないという監督・コーチだったので、みんなで作ったという感じはあります。みんなで考えて、みんなで擦り合わせて作ったという感じがあるので、そういう先輩たちの経歴も全部見て、だからみんなでやるっていうことも覚えたし。だからみんなで考えてやっていくというのも

面白いんだなっていうのは思ったし、面白さをそこでも感じました。あとは自分たちが強くなっていくのもそうですけど、相手のチームとか自分のチームメイトが強くなるのも面白くて。

**柳澤** そうなんですか。

**福士** 陸上って、なんかね、本当に一緒に走っていく仲間がどんどん強くなっていくと、チームもどんどん強くなっていくので、その相手の記録の助けになるのも自分なんだと思うと、何かそういう人助けにもなって自分の身にも返ってくるみたいな、これ、なかなか美味しい職業だなと思って。

**柳澤**トラックの女王になって。

**福士** そうなってくると、今度会社との繋がりが面白くなってきて。私、部署で働いているので、自分が優勝すると、その部署でお祝いができるんですよ。お祝いも経費で落ちるので、決起会とは別に福士加代子おめでとの会みたいな感じで、会社のその部署がみんなでお祝いをできるのです。私もそれでモチベーションが上がって、それが私の中では面白かったというか。みんなから応援されて、また自分もそれに応援返しじゃないけど「飲み会に行けますね。」みたいな感じで、お互いウィンウィンだったという感じはあります。自分も社会に貢献してるというのがあったので、そういうのができて、さらに陸上できてというのが何か自分の中ではいいバランスでできたかなっていうのはあります。

**柳澤** そんな福士さんはもうメキメキ伸びて。

**福士** はい。初めてオリンピックに出たのが2004年アテネオリンピック。

**柳澤** オリンピックですよ。

**福士** オリンピックですよ。びっくり。みんなびっくりしたと思います。町の人もチームメイトも自分の親もびっくりですよ。だから親との関係も、ワコールに入ってからの方

がいいですね。福士家は、意外と最初は遠慮しがちな一族なのですが、どんどんワコールの人が中に入れてくれて、うちの家族はみんな含めて、ワコール社員として扱ってくれる感じがあったので、そのおかげでうちの家族は社交的になりました。

柳澤 いいですね。

福士 良かったですよ。そのお陰でというのが。本当にみんなを巻き込んで親の本性がやっとわかったというか、うちの親も引っ込み思案かなと思っていたんですけど、こんな人が生まれているんですから、無理ですわね。うちの親同士の会話よりは、みんなとうちの親たちが会話して帰ってくると福士家が平和になるというか、そういう感じがあったので、うちの家族はいろんな人にとにかく助けられています。

柳澤 オリンピックも4回も出ているのですよね。すごい。

福士 出ちゃったね。だからそのときに町の人たちとか青森県とかのありがたみはわかりましたね。学校なんて、「おめでとう福士加代子」みたいなね、私学校で怒られたことしかないんだけど、「おめでとうオリンピック」という垂れ幕かけてもらったりとか、いってらっしゃいという壮行会をしてもらったり。

柳澤 オリンピックは感動しますね。

福士 応援ってやっぱりめっちゃめっちゃ力になりますね。ただそれに対して結果が伴わなかった場合は、ものすごく悲しくなります。ここにいちゃいけないのかなぐらい思うんですけど、また頑張りますって言って自分のモチベーションとしてまたチャレンジしていく。根底で応援されているというのは、ずっとある気はしますね。だからなかなか止められなくなっちゃうよね。

柳澤 そうですよ、競技人生そんなに長くなるとはご自身では思っていなかった、マラソンやると思ってなかったんですね。

福士 いい状態で終わりたいっていうのがすごくあったので。かっこよく去りたいなと思って、私はこんなにやれますけど終わりますみたいな感じで、「金とったんでやめます。」みたいな感じで言いたかったんですけど、なかなか金とれなくてね。

柳澤 うん。

福士 なかなか金はとれないし、銅メダルとってもうこれでいいやと思って、銅も面白くて、漢字が金と同じって書くじゃない。すごい、みんな気付いてないでしょう。銀だと金より良いだよ、銀でもいいか、なんて思ったんですけども、そのときはもう「銅メダルをとったので終わります。」というふうには何回か言って、やめたんですよ。陸上競技をやめて3ヶ月ぐらいは、ばっちり9時から5時半までOLをしていたんですよ。やっとこれで社会人だなんて思ってやっていたんですけど、体が元気すぎるのか、耐えられないですよ。これはちょっと厳しいぞと思って、この生活はもうちょっと後でもいいなと思って、「すみません、もう1回やらせてもらっていいですか。」と言って、やらせてもらいました。

柳澤 みんなに応援してもらえるその人柄もそうですし、あとは、ご自身が持つてる力というのもまだまだあったんじゃないですか。

福士 私ってそうやって思わせる走りをしていらっしゃるんですね。だからそれで苦しみました。もっとやればできるんだよって言われて。

柳澤 日本記録もマラソンですよ。

福士 それがマラソンですよ。日本記録出してハーフまで。マラソンでお前もすごい記録が出るぞって言われて思わせられてですよ、やったんですけどね。失敗だよ。失敗。大失敗。

柳澤 大失敗とは言っていますが、でもやっぱり見たくなりますよね。

福士 そう、でまた失敗がね、そんじょそこの失敗じゃないわけよ。大失敗するわけ。大失敗をすると人間ね、ここで終わっちゃいかんと思うわけよ。大失敗した後はもう1回ちゃんとやるという、そこは一番ギアが入ったときではあるんですけど。でもね、失敗するのよ、それがまた。そこから結果が出るのが難しい。トラックの女王は本当に簡単だった、トラック野郎って超簡単。マラソンですよ、本当に腹が立つ、今思い出しても。なかなか頑張っても、頑張っても結果が出ないときって、やっぱりへこみます。

でも、そうなったとしても、やっぱり諦めきれない、続けたい、走りたい、それはね地元のあるかもしれないです。根底で応援されているのも知っているのも、その人たちの「よく頑張ったね。」というのも欲しかったのもありますね。あと自分の中で納得ができなかった。トラックの女王がどうだこうだって言われて、やっぱりいい状態までもう1回返り咲きたいと思ったのは確かです。マラソンで立ち直ろうみたいに思えたので、今思えばこうやってズタボロになるのは良かったなと思います。トラックの女王だけで終わっとくと、いい気になって終わっていたなと思って、「私、何でもできます。皆さん頑張ってください。」ぐらいな感じだったんですけど、できないことってあるよね。

柳澤 でも酸いも甘いも全部知っているからこそ、いつも笑顔で人にも優しく余裕もあって、という今の福士さんが出来上がっているのかなと思いました。

福士 そうですね。マラソンやって失敗したのがやっぱ一番いいきっかけにはなりましたかね。だから見栄を張らなくなりましたね。見栄とか意地とかそういうのを張ってるとね、疲れちゃうのよ、ただでさえマラソンは疲れるのに、そんなところに時間と体力を使ってられないと思って。「お願いしま

す。」が言えるようになりましたね。

柳澤 なんか自分の中の意固地な部分とか全部捨て去って、柔軟になって、そのままの福士さんが出てきたという感じなのではないかな。

福士 そうですね。あとはちょっと欲が出ましたね、人生いい状態で終わりたい、いい状態にもう1回行きたいと思っちゃうんだよね。だから、金メダル目指しますって言うっちゃったもんね。

柳澤 でもそういうところにみんな魅了されたし、みんな大好きだし、応援したし。

福士 なんかやれるんじゃないかと思わせたこの体は良かったなと思いますね。

柳澤 でも本当に惜しまれつつ2022年大阪ハーフを最後に、第一線を退いたんですけども、ワコールのアドバイザーをされていますし、あとは、駅伝を主催しているのですよ、皆さんご存知でした？

福士 知らないですよ。2022年に引退しますと言ってから、1年以内に何かしなきゃというのが自分たちの陣営でありまして。何年後かだったらできるんですけど、「何年後かだとお前はもう忘れ去られるぞ。」という話になって、とりあえず1年以内か1年後ぐらいに何か大会をやろうって、何年も続けようと思ってないんですけども、まず何かやろうっていうのを思い出して。だったら自分でもランニング大会を開いてみたらどうかな、と思って。

柳澤 すごい行動力。

福士 そう、ガチのレースをやるんだったら、どこでもやれるなと思ったので。だったらもうちょっと楽しい感じの、ミニ駅伝みたいな感じで綺麗にしちゃおうっていうので、やったのがこの「笑って走れば福来たる駅伝」っていう名前までつけました。

柳澤 すてきなネーミングですね。笑福駅伝ですね。

福士 しょうふくとも読むんですけど、「わらふく」と読んでいます。

柳澤 その駅伝の映像があるということで流してみます。

福士 青森県とかでね、やれたらよかったんですけど、最初は香川県でやりました。来年の3月も29日土曜日にやるんですけど、香川県の八島レクザムフィールドという競技場になります。私が香川県を選んだのは、私が悩んだときレースで優勝したり、10代でジュニア記録を出したり20代では丸亀ハーフっていうちょっと有名なハーフマラソンでも日本新記録を出したりというのがありまして、私の中でパワースポットみたいな形になっています。この大会は小学生以上から大人は何歳まででもOKでして、このコースを1.9キロかな、2キロないぐらいのコースを皆さんで2名からマックス8名で8周するという形の駅伝をしています。

柳澤 もうみんな楽しそうに走っていますね。

福士 とにかくルールは何でも良しなので走ってゴールしてもいいし、歩いてもいいし、仮装もよしという形で。

柳澤 本当に皆さんにこやかにしていますね。

福士 記録はちゃんとチップでとっているのですが、優勝から123位までは表彰があるんですが、私が大会委員長で主催なので、勝手に選ぶ賞みたいな笑福大賞とか、すごく笑いを取りに来たで賞とか、美しいで賞とか何かそういう必ず賞か何か作ってやっています。2回目からは最後にうどんリレーというのを作りました。

柳澤 めちゃめちゃ面白いじゃないですか、笑福駅伝。素晴らしい。これを青森県でも開催して欲しいですね、皆さん。

福士 はい。第1回目の優勝者は3世代で走ってくれた、孫からおじいちゃんにたすき

を渡したいっていうチームを選んで、笑福の大賞にしました。

柳澤 素晴らしいですね。もう記憶に残る。うわー、ぜひ笑福駅伝ね。

福士 各地で走るのが面白いとか、スポーツが面白いなと思ってくれたらいいかなと、あとは思い出に残ればいいかなっていうのは思っています。

柳澤 絶対思い出に残りますよ。福士さんに会えるっていうのもそうだし。

福士 とにかくみんなやって、繋がりをもってくれたらいいなとは思いましたね。

柳澤 福士さんから、いろいろ仕掛けていますね。

福士 そうなんです、本当はこの青森とか地元で何かできないかなって、今ちょっとコースを見てきてはいるんですけど。

柳澤 今後の情報に乞うご期待ですね。青森もそうだし、東北各地でも、こういう楽しめる走るイベントがあるといいですね。今日は東北各地からいらっしやっていますって感じですね。

福士 結構マラソン大会ってあるんですよ。雪が降らない地域とかはもう毎週のように、今だとリレーマラソンとかマラソン大会があるんで。辞めてから気付きましたね。こんなに毎週毎週どこかの地域でやってるんだなと。

柳澤 誰でも始めようと思ったらできるっていう手軽さ気軽さ。

福士 出張先とかでも靴を1足持ってるだけでちょっと町並みを散策できる。今も普段は週1回、だいたい毎日走らなくなりましたけど、今日の朝もちょっと板柳町を走ってました。

柳澤 朝走ってたんですね。すれ違った人いっぱいいたかもね。

福士 ごめん、誰もいなかった。河川敷に誰もいなかった。でも、その後にもいつもお風呂

に行くので、温泉でみんなと会います。裸の付き合いです。裸で何回か握手したことがありますよ。地元の銭湯のおばあちゃんたちの話を聞くと、津軽弁聞くとさ、さっぱりしますよね。

**柳澤** やっぱり津軽弁ですかね。

**福士** 今ちょっと普通な感じになってますけど、あー、この津軽弁わかんないかなって思っても、よく聞いたら全部わかるなと思ってます。一番さっぱりしますね。

**柳澤** 本当に生き生きとやりたいことをやって、できなかったことはもう絶対またやり遂げるっていう気概で人生を過ごしてこられて、自然と生きがいを見つけていってるってうか、充実した生活を送っている感じがしますけど。

**福士** しているかな。でも引退してからは、頑張っていたあのときの方が充実していたんだっていう気はしますけどね。あのときすごい苦しかったり、こんなことに一生懸命になるなんて「もうくそくらえだ。」と思ったときもありましたけど、そうやって思えるっていうのも充実していたんだなと思います。そのときは苦しいけど、「そんなもん絶対2度とやらない。」と言いながらもやっていた、意外と青春というのはああいう感じなのかなと思って、今やめてみるとね、ああいうのも全部含めて頑張っていたんだらうなっていうのは感じます。今なんて普通にネットフリックス見て、これで1日過ごそうと思えば過ごせるなんていうときがあるので、誰からも言われないうっていうのは、なかなか平和だけどやりがいかって言われたら違うかもしれないかなっていうのはあります。

**柳澤** いわゆるウェルビーイングに繋がるような自分を解放する生き方をされてきてるなと思うんですけど、皆さんにこういう考え方がいよとか何かヒントありましたらお願いします。

**福士** 健康だよ健康。健康でいなさい。とにかく健康でないと駄目ですよ、健康でいるためにはちょっと歩くとかは必要かなと。歳をとってくればくるほど思うかなと思います。じっとしている時間は好きなんですけども、「いい加減もうちょっとぐらいは歩かないといけないな。」というのは自分でも感じるので、面倒くさいですけども、ちょっと動いた方が流れはいいです。時間の流れとか、自分の頭の冴える感、回転数とかもちょっと違うかなという気はします。あと困難とか、これ無理だなんていうことも多分あるとは思いますが、本当に無理だったら多分やめた方がいいですけど、何回も逃げたくなるようなことは多分1回やらないと駄目でしょうね。

**柳澤** そうですか。

**福士** うん。立ち向かわないと駄目でしょうね。何回も私も逃げてきたんですけども、やっぱりそこには向き合って1回やってみるっていうことをした方が扉は開くのかなって思います。自分の中ではずっと逃げてた部分があったんですけども、今向き合わなきゃいけないときが来たので、今ちょっと向き合ってはいるんですけど、まあ嫌ですね。向き合うっていうのは。向き合ってはみたものの、あまりにも嫌すぎて涙が出るっていうときはありました。そこで一旦行動したので、次のやらなきゃいけないことが出てきて、それは時間差でやってくるんですけども、何かそういうのも消化していくとやらなかった悶々としてるときよりは、ちょっと動いたときの方がイライラはありますけども、何か自分の中では進んだかなっていう気はしますね。

**柳澤** そうですね。いろんな不本意な現実が目前でやってくる時は逃げたくなるけど、でも何回も同じことがやってくるから向き合っちゃんとクリアして消化していく。

**福士** そうね。そういうときはもう自分の言葉で言うしかないですね。言葉で伝えるって

いうことは自分の一番の武器かなと思います。会話をした方がことはスムーズにというか、そこで内乱は起きますけども、そこだけで終わって、その後は勃発しないので、向き合ってちゃんと喋った方がスムーズに解決すると思います。

**柳澤** そうですよ。そういったコミュニケーションとちゃんと話をするっていうのが太い繋がりになっていくんじゃないかなと。

**福士** 自分の中ですっきりしてたらいいかなと思います。自分の悶々がたまらないように皆さん生きてください。

**柳澤** たまらないように。そうですね。ちゃんと消化していきましようということで。ここからは、会場の皆さんから質問をいただくかなと思います。

**質問1** 福士さんがフルマラソンを走って、苦しいときも悔しいときもインタビューではいつもニコニコしているので、その心のモチベーションというか、どのような気持ちなのでしょう。私だったら絶対顔引きつったりとかにらんだりしているんですけど。

**福士** そこまで苦しがつてないかもしれないです。苦しいときは、多分ゴールしたときじゃないんですよ。ゴールする前が苦しくて、「クソこんなもんやめてやろう」って思ったときを超えてきてるので、ゴールのときはみんなね、平和、やりきったみたいな感じになるので、とりあえずゴールしたことにまず満足するっていう形になるので。悔しさっていうのは後から出るかもしれないですね。2番とか、あと何秒かで日本記録が出ないとか、そういうあと何秒かでオリンピック届かなかったっていうことになるとすごい悔しさが出てくると思うんですけど、いかんせんマラソンの場合、そんなギリギリの試合をあんまりしたことがなくて、とにかく私の場合は

終わって「喋らせろ」みたいな感じですね。なので、まずはその笑いでもっていつてる感じはあるかもしれないですね。あとカメラが来て使われるの何秒とかなので、パンッて切り返して終わろうっていうのは即座に考えます。

**柳澤** 正直な大きな思いをパンと言っていた。でも笑顔がやっぱり印象的でしたよね。皆さんも励まされたと思います。また、すごく自分を客観視する力がある感じがしますよね。

**福士** それはあるかもしれないですね。客観視したときにもっと怒ったらどうなるんだろう、みたいなのをちょっと想像していったらなんか逆に笑いになるっていうか、ちょっと違うのかもしれないですね。はい、そういう感じでやっております。

**質問者** はい、ありがとうございます。

**福士** そう、マラソンはね苦しさが何回も来るのよ。もうみんなやってみて。いやほんと42キロだからね。本当に。

**質問2** 県内の南部町の方で、子どもたちに、陸上を15年ぐらい教えております。福士さんが教えるにあたって大切にしていることは何ですか？特に小学生に関しては陸上をどうやって楽しませて伸ばしていけるかなと思って、どういうところを大切にしているのかお聞きしたくて質問させていただきました。

**福士** 小学校とかは楽しいっていうレベルがいろいろあっちこっち動いたりするので、1個のことをやるっていうのは自分の中でも飽きちゃう感じがあった。陸上部なんですけども、ソフトボールやったりバスケットボールやったりっていうのもいいかなとは思いますがね。いろんな動きをやってみる方が自分の中ではいいかなと思うので、陸上部の中でもボール遊びを入れたりとか、あと何かを

投げたりとかってというような動作を入れて、遊ばせる形では教えたりはしています。あと基本動作としては綺麗な姿勢みたいなのは多分あるとは思っているので、要は体の使い方をちょっと覚えさせるというか、体をこうすれば使えるんだってということを主にやっています。自分で自分の体を使いこなせていくと面白いなっていうのを、ちょっと思ってくれたらいいなって。私は多分1個のことをやるというよりは、いろんなことをやらせるという形で試してみたりはしています。

**質問者** ありがとうございます。

**福士** 自分の体を使いこなすってハッとしたんですけど。全然使いこなせてないって。なんかね、こんな動きもできるんだとかってのがちょっと知れたりすると、面白かったりするのかなっていうのがあったので。あとはもう、基本的には音を出したり音楽出したりして、いろんな跳ぶ動作をしたりしてランニングに繋げるっていうのはありますね。ランニングってどうしても前後の動きとかしかなないので、ちょっと飽きがちなんですよね。なので、いろんなマット運動とか、障害物を入れてみたりとかって遊ぶ感覚をちょっともってやる感じにはしているとは思っています。

**柳澤** 楽しむための工夫は怠らない。

**福士** 怠らないし、聞いてみます。子どもたちに何したいって聞いてみてやらせてっていうのはありかなと思います。

あとはもうチームメイト使ってでしょうね。最後飴ちゃんか何かあげると大体みんな楽しかったなってなると思うんだよね。物で釣るというのはもう定番かなとは思いますが、そんな感じです。

**質問者** はい、ありがとうございます。

**質問3** こんにちは。福士さんの本を買って読みました。とっても楽しかったです。今日健康でいましょうって最後におっしゃった

んですけれども、歩くこともすごく大切だし、あと福士さんの食生活ってどうだったのかなってちょっと伺います。

**福士** 真面目にやった方がいいですね、現役時代は完璧でした。現役終わってから、久しぶりに味噌汁飲んだかなっていう気はしました。今は適当な食生活をしております。なので、食生活に関しては健康ではないかもしれないです。ただ現役生活終わってからは量をそんなに食べないように気をつけています。成人女性よりもちょっと少なめぐらいで過ごしていくような感じですよ。動いたときはちょっと食べたりはしてますけど、走らなくなってくると、なんか全然体の不調とかもわからなくて、どっか痛いとかもあんまり感じてなくて、昔はどこが痛いとかすぐわかってたんですけど、やっぱり走って自分の体を調整しに行くっていう形なので、私の場合はちょっと走って動いた後に食べるっていう形にしています。

あとは酒もたまに飲んでますけども、お酒も休肝日はつけないと駄目だっていうのは、身をもってわかりましたので、毎日飲んじゃ駄目。お酒の量は、本当現役時代はすごく飲めたんですけども、走らなくなると消化できないみたいで、酒の量が減り飲めなくなりました。頭にたんこぶみたいなのが出始めてきて、汗出しじゃないけど運動してからのの方が自分はすごく体が良かったんだなと思うので、ぜひ皆さん運動はしてください。

**柳澤** でも現役の頃は完璧で、栄養士さんがいたっていうことですよ。

**福士** はい。なんか完璧な生活が長かったので合宿が終わった後、自分の地元に戻ってきて1週間2週間とかは適当な生活をするんですけども、またすぐ3ヶ月とかの合宿に入ったりするので、全然その1、2週間は適当な感じでもちゃんと綺麗な体にもどるので、そ

ういう生活は良かったなとは思いますが。

基本あんまり嫌いなものがなかったのもあったんですけども、あとは今気をつけてるとしたら、運動と食で言ったら、量をちょっと減らすのと、よく噛むってことはしてますね。丸呑みが大好きで、食べ物の丸呑みが本当に得意というかこのなんかね、通る感じが好きなんだろうね。だからよく「カミカミごっくん」ぐらいでいくんですけども、それをしたら本当に体調も悪くなるので、とにかく噛んで噛んで噛み砕くということはしてますね。

**柳澤** はい。皆さん、しっかりよく噛んで食べましょう。

**福士** 急いでもよく噛んでくださいね。量少なくすれば噛めますからね。時間がないのに量だけ行くと、もう蛇のごとくごっくんですからね、本当に胃が出ますから、皆さん気をつけてください。栄養になってませんから。

**質問4** 八戸市でPTAをやっております。2002年の全日本の駅伝で、3区10キロを走って。中継地点直前で、前の選手を抜くときに足がからんで、転ばれました。

**福士** 私ね。そうだと転んだ。

**質問者** そして足を引きずりながら走って、たすき渡して、区間賞をとったんだけど、膝の靭帯切ったじゃないですか。それから2ヶ月後の青森で開催された冬季アジア大会の聖火リレーがあって、最終ランナーだったんですよ。あれってギプスのままで、止められたりとか、こういうのやらなくていいんだからって言われなかったですか。

**福士** 言われました。言われたんですけど、なんかねやりたくて、そこだけほと、だだこねて、本当にこれしかやってないです。台の上に乗ってこれしかやってないんで、あんまり私も記憶がないんですけど、本当に誰か

がここまで持ってきてくれて、はいと言うだけだったからね、何の感動もないですね。あと冬季だったので周りが本当に静かで、何にもないところで私だけが「ちょんっ」てつけるだけで、あと多分どっか中継なんだろうね、中継でワッって多分なるんですけど、私がつけたときは静寂なままで、誰もいない。本当に断裂して、あれはちょっと大変でしたね。3ヶ月4ヶ月ぐらいのスピードで復帰したので、あれからの後遺症もちょっとあったんですけど。覚えてくださってありがとうございます。

**質問者** でも、6月の大会ではすごい記録を出しましたね。

**福士** また出しちゃったんですよ。そうすごいよね、本当すごい。でも、神々の力もいろいろありましたね。神の手って言われたゴッドハンドの先生たちが何人か集まってくれて。針もいれば、祈祷師みたいな人もいたし。いろいろいましたけど、全部良くなってってという話でもっていったので、マインドコントロールっていうのは大事なかなと思います。

**質問者** ありがとうございます。

**福士** なので、そういう感じで本当にいろいろな人に助けられて、この人生を生きているので、陸上やって本当、人との縁がすごく、繋がりでいい思いをさせてもらってます。

**柳澤** あとはやっぱりすごくポジティブに物事を捉えられるっていう、そこもね、大きな魅力だと。

**福士** そうですね。それも周りの人に助けられた感じはあります。明るく悩みなさいって言われてる人がすごく明るい方だったので。

**柳澤** 明るく悩め。いいですね。

**福士** 明るく解決しなさいって言われて、本当だね先生、みたいな話になったり、あと何かそういう人からいろいろ勉強させてもらって、なるほどねっていうことがある。だから

「ごめんなさい。」「お願いします。」と、「ありがとうございます。」と言えたら、大体全部うまく回るのかなっていう気はします。お願いしますの前にちょっとごめんなさいか何か言ってからお願いしますと言うとか、ただタイミングはあります。ありがとうございますと言われて、すごいカチンてきたりとか、そういうときはありますけども、3つの言葉をちょっとうまく使えば、素直に使えば結構解決するのかなと思います。お願いしますとか、なかなか言う機会がなかったりするんですけど、本当にやりたいときってやっぱりお願いしますと言わないと、本当に動かないですもんね。やってくれないしね。そのときに大いに感謝して、「ありがとうございます。あなたがいないと駄目でした。」みたいな大げさにありがとうございますと言って、感謝を伝えればいいんだと思います。

**柳澤** 素晴らしい。でも本当に現役時代も後輩とか、周りのサポーターの皆さんにメッセージを手書きでよく書いていたっていう、エピソードもたまにききました。

**福士** はい。たまに書きましたね。

**柳澤** 気遣いっていうか、思いやりというか。

**福士** いや多分ね、自分のためでもありますよ。なんかこうやって書いてみて自分がどう動くんだろうっていうのをちょっと試した部分もあります。やった後にどう自分が感じるんだろうとかっていうのをちょっとね、何でもやりたがりなので何回も失敗はしてるんですけども、やってみてすごい後悔したこともいっぱいあるんですけど、やりたかったもんみたいな感じで通してます。

**柳澤** いやでも本当に冒険してるっていうか、自分の人生でいろいろ実験して好奇心をもって挑戦してっていうことを、楽しまれている感じがしますね。

**福士** それに携わる人は大変だと思いますけ

どね。巻き込んでいきたいなと思います。

**柳澤** そうですね。皆さんもぜひ、巻き込まれましょう。あっという間に、お時間になってしまいましたけれども福士さんから何か皆さんにPRとかありますか。最後に人生楽しめるのメッセージがあればお願いします。

**福士** そうですね、今、笑福駅伝もありましたけども、自分は目標としては80歳とかになっても、ちょっとそこまで行くのにすげえ速いおばあちゃんだなんて言われることを目指してるので、走ることはこれからも続けていくとは思ってます。とにかく走るっていうことは苦しいところがあるんですけども、苦しいを超えてちょっと楽しいっていう一面があるような大会を駅伝という形でやってますので、全国の人が来てくれたりとか、何か陸上を通していろんな方と繋がってまた次の話が来たりっていうのがあるので、いろいろなご縁で皆さんが繋がって、いい形で皆さんとスポーツとか陸上繋がって、いければいいなと思います。こういう大会に、ぜひ協力、協賛したいという方はいつでもご一報いただければありがたいと思います。

これからも何か活動していきたいと思いますので、各地域の皆さんにお世話になるときは、どうぞよろしく願いいたします。今日はどうもありがとうございますございました。

### 次期開催県あいさつ



岩手県社会教育連絡協議会

会長 大橋 清 司

こんにちは。ああいうトークセッションの後に話をするのは、つらいですね。私は根が真面目なものですから、真面目にしかお話できないので大変申し訳ありませんが、よろしくをお願いします。本当にいいトークセッションだったと思って聞いておりました。ありがとうございました。

このように本当に何年ぶりなのでしょうが、こうやって集って、こういう東北大会を開催できるのは本当にいいなと思います。本当に集い学び交流できる大会であってほしいと願っています。

このようなチラシが袋の中に入っていますので、出していただけますでしょうか。岩木山と比べてどうでしょうか。岩手山でございます。私は岩木山に登ったことがあるのですが、女子高校生がスカート姿で登っているのを見てドキッとした覚えがあります。これは岩手山でございます。

盛岡駅から3分のところでこの景色が見られます。その橋の上から撮った写真ですので、期待してぜひ岩手山も眺めていただきたいと思います。スクリーンに盛岡の様子が映りま

すので、それを見ながらお聞きいただきたいと思います。映写をお願いいたします。

令和7年度の東北大会は、全国大会を兼ねて開催されます。盛岡は、昨年ニューヨーク・タイムズでロンドンの次にいい街に選ばれました。理由は、中心市街地に歴史的な建物、川や公園などがある。大正時代に建てられた西洋と東洋の建築美が融合した建造物がある。近代的なホテルと歴史を感じる旅館がある。こうして流れる川などの素材に優れている。盛岡は北上川、雫石川、中津川の3本が中心街に流れています。人混みなく、歩いて回れる宝石的スポット、こういう評価をいただいております。岩手山がどこからでも見られる、冷麺、じゃじゃ麺、三陸の産地などがある。国内はもちろん海外から多くの方々が盛岡を訪れております。私も何人かの人に聞きましたが、食べ物が美味しい、空気が美味しい、人が親切だっというような評価をいただいております。ありがとうございました。

さて、盛岡大会は、令和7年10月29、30、31日、水木金、全国大会を兼ねて行われます。大会スローガンは「学びと絆で未来を開く～社会教育のイーハトーブを目指して～」、イーハトーブという言葉聞いたことはございますか。宮沢賢治の造語で理想郷ともいう意味です。研究主題は、「ともに学び、支え合う社会教育の実践、ウェルビーイングの実現に向けて」としてあります。全体会は、アトラクション、開会式、表彰式、記念講演、シンポジウム、分科会と6つの内容を考えております。

なお、分科会は、1つ目は社会教育委員の役割、2つ目は家庭教育支援、3つ目は学校地域の連携・協働、4つ目は人づくり・繋がりづくり・地域づくり、そして5つ目は公民館・社会教育施設の役割と5つの分科会で進

めさせていただきます。

今まで公民館部会は全国大会ではなかった部会なのですが、東北大会を兼ねていますので、公民館部会からも許可をいただいておりますので、よろしく願いいたします。もちろん第1日目の夜は懇親会も設けてございます。本当はここで講演、シンポジスト、各分科会のコーディネーター、発表者をお話できればよかったです。今調整をしておりますのでお許しいただきたいと思っております。

東北大会の参加費は3,000円ですが、全国大会は5,000円と決められておりますので、よろしく願いいたします。分科会の会場も駅周辺であります。公民館部会だけは少し離れておりますが、旧南部藩の別邸で開催予定です。紅葉の美しい庭があります。

バス移動によりまして駅から15分ぐらいかと思っております。

昨年度の宮崎大会は盛岡から列車で12時間。なぜ飛行機で来ないのかとみんなに馬鹿にされましたが、私は列車で行きました。12時間です。本年度の水戸大会は仙台から4時間。盛岡は、東京から2時間10分で行くことができます。2時間10分です。岩手は遠いと思われています。今日も青森まで列車できましたが、2時間かからないで青森に着きました。東北は近いですね。

それから会場は駅から2分です。駅構内と言ってもいいところに会場を設定してございますので、よろしく願いいたしたいと思っております。

来年度青森大会のように素晴らしい運営ができるかどうか甚だ不安ですけれども、素晴らしい盛岡に学習と交流、観光を兼ねて、ぜひおいでいただきたいと思っております。たくさんの方々の参加をお待ちしております。よろしく願いいたします。ありがとうございました。

## 閉会の言葉



東北地区公民館連絡協議会

会長 高橋 宣子

東北地区公民館連絡協議会会長の高橋と申します。

まず初めに本大会におきまして、長年にわたり、公民館活動の充実、社会教育活動、社会教育の発展にご尽力いただいたご功績に対しまして、表彰を受けられました皆様方に敬意を表しまして、心からお祝い申し上げます。

引き続き活動を続けられる方、立場が変わっておられる方、様々いらっしゃると思います。先ほどの福土様の講演でもございましたように、健康第一ということでございました。それぞれのお立場でも、今後ますます健康でさらにご活躍をご祈念申し上げたいと思っております。

また、本日はお忙しい中この会場に300名を超える東北地区の公民館および社会教育関係者の皆様方、そして全国公民館連合会会長の中西会長そして全国社会教育連合鈴木会長、この青森の地で一堂に会しまして、全体会が盛会に執り行われましたことは大変喜ばしく思います。

また、大会開催に際しまして、準備運営に当たって様々お気遣いいただいているスタッフの皆様方、関係者の皆様方にも改めて感謝

申し上げたいと思います。

今日のオープニングは五所川原第一高等学校の情緒あふれる津軽三味線部の演奏で始まり、青森県教育長、青森市長の心温まる御祝辞、そして福士加代子さんの走りを通した人生との向き合い方の充実したお話をいただきました。

こういった学びが充実した時間は早く過ぎるものでございます。

今日これから行われます情報交換会、また明日の分科会も、皆様方にとりまして、活力の源となるような実り多いものになりますよう、お祈りしております。

それではこれもちまして、第46回全国公民館研究集会・令和6年度東北地区社会教育研究大会・第69回東北地区公民館大会・第54回青森県社会教育研究大会の全体会を終了いたします。

皆様大変お疲れ様でした。

## ■大会報告（分科会）

### 分科会一覧

#### 分科会のコンセプト

研究主題「学びを生かし、つながりをつくり出す社会教育の実践」に基づき、各テーマにおいて、「地域コミュニティにおける個人と地域全体のウェルビーイング」に関して事例を「たたき台」とし、地域の問題を解決するための具体的なアイデアを出し合う場とする。

	第1分科会	第2分科会
	<p><b>豊かな学習機会に対応する社会教育の推進</b></p> <p>多様な分野と連携しながら、つながりづくり・地域づくりを担うことができる社会教育人材の育成について考える。</p>	<p><b>社会教育施設の機能の充実と活用の推進</b></p> <p>社会的包摂や地域コミュニティづくり、地域課題の解決等において社会教育施設が果たすべき役割について考える。</p>
会場	青森県観光物産館アスパム 会議室「十和田」（4階）	青森県観光物産館アスパム 会議室「八甲田」（6階）
コーディネーター	東北学院大学教授 原 義彦氏	弘前大学准教授 越村康英氏
事例発表	①地域教育で紡ぐ東通村の未来  (一社) tsumugu代表理事 小寺将太氏	①災害に強い地域づくりを目指して  江陽自主防災会会長 (八戸市江陽公民館館長) 田邊隆氏
	②世代を越えた学びの創出 ～五城目みんなの学校～  秋田県五城目町教育委員会生涯学習課主査 猿田和孝氏	②「公民館のチカラ」でまちに元気と笑顔を！ ～岩手町中央公民館の挑戦～  岩手県岩手町中央公民館館長補佐 志田順悦氏
運営担当	三八教育事務所 三八地方社会教育委員連絡協議会 青森県教育庁生涯学習課 青森県総合社会教育センター 責任者・司会 若林 保 主任社会教育主事 (三八教育事務所)	八戸市教育委員会 青森県公民館連絡協議会  責任者・司会 山野下 貴信 副参事 (八戸市教育委員会)

第3分科会	第4分科会	第5分科会
<p><b>健康や感動を生み出す スポーツ振興の推進</b></p> <p>生涯にわたって運動やスポーツに親しむ環境づくりについて考える。</p>	<p><b>郷土芸能の継承と文化活動の推進</b></p> <p>地域で生まれ、保存・伝承されてきた郷土芸能や技術の継承について考える。</p>	<p><b>家庭・学校・地域の連携と協働の在り方</b></p> <p>家庭・学校・地域の連携・協働の推進による地域の教育力向上について考える。</p>
青森県観光物産館アスパム 会議室「岩木」(6階)	青森県観光物産館アスパム 会議室「白鳥」(5階)	青森県観光物産館アスパム 会議室「あすなろ」(5階)
青森明の星短期大学学長 花田 慎 氏	青森県民俗の会代表 古川 実 氏	三鷹市統括スクール・コミュニティ推進員 四柳 千夏子 氏
①スポーツを通じた持続可能な地域づくり  NPO法人スポネット弘前理事長 鹿内 葵 氏	①獅子踊りの伝承活動  弘前市烏井野獅子踊保存会会員 下田 雄次 氏	①鶴田町の地域学校協働活動  鶴田町地域学校協働活動推進員 沢田 真由美 氏
②学校連携から始める生涯スポーツの推進とウェルビーイングの向上 NPO法人なんでもエンジョイ面白クラブ代表理事 武田 哲也 氏	②郷土芸能を通じた郷土愛の醸成と多世代交流の推進  山形県上山市教育委員会生涯学習課副主幹兼生涯学習係長 飯野 洋 氏	②村全体・地域全体が学びの学校～コミュニティ・スクール委員会と地域学校協働活動を通して～ 福島県大玉村教育委員会教育部生涯学習課主任主査兼社会教育係長 田辺 将裕 氏
東青教育事務所 東青地区社会教育委員連絡協議会 青森県教育庁生涯学習課 青森県総合社会教育センター 責任者・司会 花田 一 仁 主任社会教育主事 (東青教育事務所)	下北教育事務所 西北地区社会教育委員連絡協議会 青森県教育庁生涯学習課 青森県総合社会教育センター 責任者・司会 藤田 幸 博 主任社会教育主事 (下北教育事務所)	中南教育事務所 中南地方社会教育委員連絡協議会 青森県教育庁生涯学習課 青森県総合社会教育センター 責任者・司会 秋谷 啓 児 主任社会教育主事 (中南教育事務所)

## 1 事例発表の要点

### (1) 地域教育で紡ぐ東通村の未来

一般社団法人 tsumugu 代表理事 小寺 将太 氏

#### ア 地域の現状

現在、東通村の人口は5,610人（令和6年6月末時点）。日本の地域社会全体と同様に年々人口が減少している。特に東通村では就職・進学期の地域外流出が課題となっている。また、若年層の流出のみならず、自然減も顕著に現れ、子どもの人数も減少している。このような人口減少という課題の中、世代間交流や空き家問題、伝統芸能の担い手不足など多くの課題が山積している。

#### イ 取組内容

東通村では上記の課題が存在する中、一般社団法人 tsumuguをはじめ若手主体の地域団体が小中高大の学生を対象とした地域創生人材の育成に挑戦している。以下に3つの取組を紹介する。

##### (ア) 地域外の大学生を対象とした共育型インターンシップ

共育型インターンシップは地域外の大学生を対象に約4週間、村内の企業・団体にて住み込みで新規事業の立ち上げや地域課題の解決を実践する内容となっている。これまで、むつ下北地域全体では約150名、そのうち東通村では約40名の学生が滞在し活動してきた。



##### (イ) 地域内の高校生を対象とした地域人材育成事業

地元高校生を対象とした人材育成事業は平成30年に実施した青森県教育庁生涯学習課の「地域のお宝」を学び地域活動を担う高校生育成事業を皮切りに様々な事業を実施してきた。具体的には空き家のリノベーションに取り組み、コミュニティスペースを開設した他、東通村魅力発信事業をテーマにCM作成やSNSでの発信等に取り組んでいる。



#### (ウ) 地域内外の小中高大学生を対象とした村内イベント運営事業

東通村では令和4年より住民参加型イベント実行委員会が主体となって、村内の夏祭りを運営している。これまでは行政が主体となって実施してきた夏祭りを村内に在住する若手人材が主役となって企画運営しています。本イベントにおいて、村内に住む小中高生がイベントスタッフとして参画し、村内イベントの企画運営に挑戦している。また、地域内外の大学生もスタッフとして参画し、イベント内における地域の伝統行事であった盆踊りの復活やイベント内のアトラクション等を企画実施している。



#### ウ 「ウェルビーイング」に向けた成果

東通村では人口減少が深刻な課題となっており、若年層の減少や流出に伴い、世代間交流や担い手不足といった課題が深刻であると上記で述べた。そのような課題に対して、3つの取組を地域教育の一環として取り組んできた。

共育インターンシップでは地域外の大学生が「関係人口」として村内に滞在し課題解決の実践に取り組んでいる。若手の外部人材が村内で村内の若手と共に活動していくことによって、地域内の内発性が高まったことが成果だと考えている。

また、地域内の高校生を対象とした地域人材育成事業では、地域の課題を「自分ごと」として可視化し、実践していくことで、参加した高校生の地元愛形成に寄与したと考えている。2つの事業に参加した若手人材は3つ目の事業である村内イベント運営事業に参加している。村内における地域教育を推進したことによって、地域の内発性向上、地域愛形成、そして関係人口増加につながったと考えている。

#### エ 今後の課題及び方向性

今後の方向性は、地域教育を推進するコーディネーターの確保・育成であると考えている。上記の事業を推進するにあたって、様々なステークホルダーを紡ぎ、事業を企画運営していく人材の確保・育成が課題であり、今後の展望とする。

## (2) 世代を越えた学びの創出～五城目みんなの学校～

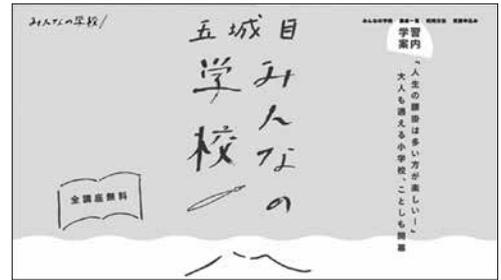
秋田県五城目町教育委員会生涯学習課 主査 猿田 和孝 氏

### ア みんなの学校の経緯

五城目町では、町で唯一の小学校である五城目小学校の改築に際し、住民誰でも参加可能で自由に意見を出し合う場、「スクールトーク」を実施した。地域や社会が今後の学校との関係を考える話し合いから、誰でも気軽に学校に来て学べる仕組みが望まれていることがわかった。その後のコロナ禍を経て、これまでの社会教育の枠にとらわれない緩やかな学びの機会も求められるようになった。この2つの要望に応える形で事業のイメージが固まってきた。

### イ みんなの学校とは

みんなの学校は、学校開放を利用した社会教育講座群。簡単に言うと、誰でも気軽な参観日のように学校で学ぶことができる取組。休日や夜間に社会教育講座を実施することもあるが、みんなの学校の特色として以下のようなパターンがある。



- (ア) 学校授業を社会教育講座として 住民が参加するパターン
- (イ) 社会教育講座に教員が立会うことで学校授業として成立させるパターン
- (ウ) 子どもの下校時間に合わせて開催するパターン

このような様々な形での講座を行政、学校、民間事業者の3者で話し合いながらパッケージ化して、学校に誰でも参加できる環境を作っている。



### ウ みんなの学校から生まれている効果

現在の社会教育は、人づくり、つながりづくり、地域づくりを目標としている。みんなの学校では、その他にも以下のような3つの特徴が見られる様になってきた。

- (ア) 1つの講座での学びが、境界を越えて次の学びにつながる
- (イ) 地域の教育に関連する要素を可視化する働きがある
- (ウ) 関係が生まれると、それが次の学びに向かって自走すること

これらは、地域と学校が学びを通して一体化する働きもあるが、同時に個々の学びから見ると、自律した個々の学びが学校（公的な学び）を軸にして分散した形を取っていると見られる。個々の学びも活性化されるし、地域全体の学びが活性化されることも目に見えてきた。自然の生態系のような自律分散型の教育環境を構築することで、社会教育と学校教育の目指す事業の目的を、相互に補完する役割を持っていると考えられる。

## エ みんなの学校とウェルビーイングの関係

みんなの学校のウェルビーイングに対する役割は、学びを通じて多様で自然なつながりを促すことにより、地域や自己の再発見・再構築とつながり、自己と地域のよりよい在り方を実現できることだと思う。講座に複数の教育目的をもたせることで、より多くの人に関心を持ってもらえるようにカリキュラムを構成していることから、参加者の学びや気づきを通して自己肯定感が高まり、かつ、学びをきっかけにしたつながりは、更なる学びの循環を促し地域の自己肯定感を高めることにつながっている。

今の自分と地域を肯定的に受け止めることと、つながりを広げながら新たな方面への意欲となることでウェルビーイングが向上するとともに、都市部と比べて教育資源が不足しているように思われがちな地域における教育の価値を再発見することにつながっている。更に、地域の教育要素を可視化することで地域を再認識でき、ローカルなアイデンティティを確立することにもなる。自己と地域を客観的にみつめる力を養うことも住民と地域のウェルビーイングの向上につながっていると考えられる。



## オ これからのみんなの学校

これまでは地域の学びに重点を置きながらデザインしてきたが、今後は別の角度から、例えば、社会科学や、現代的課題へのアプローチといった、これまでに地域の中では見えづらかった部分も教育環境の中に取り込むことで、より社会課題に対応できる人材育成を図ることが重要と考える。

公的な学びを中心とした自律分散型の教育環境と説明したが、社会を土壌とした大樹のような教育環境を持続していくことが大切だと考える。

## 2 グループ協議の主な内容

### 事例に対する質問

- ・コスプレ盆踊りやゆるキャラなど面白い取組をやっている。みんなの学校は12年前に私も作った。「みんなの学校」を取り入れて、他にどのような連携しているのか知りたい。
- かんだちくんは東通村の寒達馬をモチーフにしたゆるキャラ。みんなで楽しめるような雰囲気を作り出すために、盆踊りにコスプレを取り入れた。私たちの「みんなの学校」は3年目。JICAは国際開発メニューとして、「みんなの学校」を3年ぐらい前から展開している。今私たちはJICAとも仲良くしており、姉妹校として協力している。
- ・みんなの学校の町民センターにあった図書室が五城目小学校に移転したと資料にあるが、町民全体の社会教育法に基づいた図書館が別途にあるのか知りたい。
- 改築事業に際して、学校の一部を住民に開放するというコンセプトで作直した。ご紹介された図書館についての質問の答えは特にない。
- ・コミュニティスペースの改修費600万円をどのように集めたのか。小島さんのような事業をやろうとした場合、学校側から「不特定多数の方が来る場合、子どもたちの安全を考えると難し

い」といった意見がいつも出る。この点はどのようにクリアされたのか教えていただきたい。  
→お金を集めた方法は、床や壁塗りといった部分は地域作りに関する助成事業を利用し、資金を集めた。水回りなどについては、企業から協力を得て、借り入れや各企業から資金を調達した。最終的には600万円を集めることができた。学校の安全に関しては、2001年の池田小学校の事件から全国的にシビアになっている。学校の塀を高くすることで犯罪を防ぐことは無理だと考え、大人を目線を多くすることによって安全を確保している。

### 3 全体での共有化

#### グループ発表

##### (1) Bグループの発表

近年の行政だけでは対応しきれない時代背景を受け、民間との協働が必要であることが議論された。例えば、公民館の利用や教育委員会の関与が弱まっている。現状についても、職員の異動サイクルが早すぎることで影響しているとの意見があった。これにより専門性が欠けているという問題も指摘された。また、町長が「人づくり」に重きを置くことによって、地域課題の解決に繋がるのではないかと考えが共有された。さらに、小規模自治体と大都市との違いを考慮し、スポット的なモデル事業を展開する必要性も話し合われた。加えて、地域活動の「仕掛け人」の必要性が挙げられた。この役割を担うのは、私たち社会教育関係者の使命ではないかと感じている。最後に、我が村では、市町村民憲章が非常に重要視されており、地域のアイデンティティとして今なお大切にしている。

##### (2) Dグループの発表

地域の課題として「人材不足」が議論の中心にあった。特に学校との連携において、教職員の多忙さが問題視されており、その負担を軽減しつつ協力関係を築く必要性が挙げられた。また、地域の高齢化や少子化に伴う交流人口や関係人口の課題も指摘された。さらに、SNSの活用や足の不自由な高齢者への支援策、外部人材の導入などの具体的な課題についても話し合われた。これらの課題に取り組むにあたり、活動資金の確保が重要であり、それぞれの地域に応じた工夫が求められる。最終的に、地域住民の自主的な活動を目指し、社会教育が地域の体力作りにつながるような取り組みが必要であるという結論に至った。

##### (3) Eグループの発表

少子高齢化により人が集まらない現状について議論した。子ども向けの講座を企画しても、習い事や塾などで忙しく参加者が少ないとの意見があった。また、市民大学講座についても、平日開催が多いため参加者が限定されてしまう課題が挙げられた。そこで、土日開催への切り替えや、大学教授を招いた有料講座などの工夫が提案された。興味のあるテーマには多くの人が集まるため、市民が何に関心を持っているかを把握し、引き出していく努力が重要。また、秋田市ではICTの活用と世代間交流を重点項目としている。特にICT講座は好評で、録画して動画配信する取り組みも進められているが、著作権の課題があり、これをどう克服するかが今後の課題となっている。

##### (4) Iグループの発表

地域の課題として、若者の参加不足や高齢化による影響について話し合った。特に、地域の

教育・文化施設の老朽化が進む中で、学校、公民館、市役所を一体化した新しい施設の構築が提案された。これにより、学びと遊び、地域づくりを融合させることが期待される。また、人材育成を重視し、地域の教育環境を整えることで、持続可能な地域社会を目指すことが重要だという意見も共有された。

#### 4 コーディネーターによるまとめ

地域社会における教育の新たな在り方が中心テーマとして取り上げられ、「共育型インターンシップ」や「みんなの学校」などの実践事例が共有された。

共育型インターンシップは、一方的な子育てだけではなく、「共に育っていく」まさに社会教育の真髄である。財団という形で、民間を取り入れた取組は新鮮な話だった。「みんなの学校」は、子供のための学校だけではなく、みんなの学校なのだという考えはその通りだと感じた。地域の子供だけではなく中高生、卒業した大学生、若者、大人、高齢者もそういう概念、学校の概念を超えてその地域の学びを作り出している。今日は学びに限定した社会教育の話だったが、町全体の話であると感じた。みんなの学校というと教育的な感じがするがそうではないと思う。最後にあった未来志向のメッセージは私も同感である。

グループ協議では、課題と取組を出し合うことでいろんなヒントがたくさんあったと思う。行政だけでは無理と言う意見は、まさにその通り。教育委員会、教育行政にはいろいろな区別があり連携を取ってはいるが、教育行政は予算もあまりなく、人も少ない。やはりパワーを引き出す提案と言葉、やり方が大切だ。学校との連携、SNS、外国人材活動等の取組事例や地域の体力作りという言葉もいいなと思った。様々な取組を進めるためには、行政は環境作りをする必要がある。人が集まらない少子高齢化が原因という課題も挙げられた。出向く講座、アウトリーチを行ったり、それぞれのニーズ、内容、活動パターン等に合わせて行ったりすることも基本だと思う。公民館については、施設の複合化、利便性、その中に教育や学びの場がある地域の居場所、フラッと寄れるようなそんな空間、学びに繋がる空間になって行けたらと思う。

今日の実践発表では、共通して「きちんとしたコンセプトを持っている、理念を持っている」と感じた。どこに向かっているのか、どこの方向に進んでいこうとしているのかが明確で、様々展開できている。地域に何が必要か、頑張ればできることをきちんと定め、繋げていくというスタイルが感じ取れた。

今日の発表からは、たくさんヒントがあったと思うが、みなさんのそれぞれのところで、2人の事例の中から、良い事例からヒントを引き出していただきたい。



#### 5 参加者の感想

- 発表・講演の内容が良かった。
- グループ討議・意見交換が良かった。
- 影響・刺激を受けた。
- ▲スケジュール・進行に問題があった。
- ▲内容の質・構成に問題があった。
- ▲まとめにくかった。

※感想の詳細はアンケートのまとめに記載

# テーマ 社会教育施設の機能の充実と活用の推進

### 1 事例発表の要点

#### (1) 災害に強い地域づくりを目指して

江陽自主防災会会長（八戸市江陽公民館館長） 田邊 隆 氏

##### ア 地域の現状について

江陽地区は、北は太平洋、東は新井田川、西は馬淵川に囲まれた海拔3.3メートルほどの平坦な地形が広がる地域である。中央部には大型ショッピングセンターのラピアがあり、バスターミナルが併設されて交通の便がよいことから、市民はもとより近隣町村からも多くの人々が集まるといえる特色を持っている。

これまで、八戸市は昭和35年のチリ地震、昭和43年の十勝沖地震、平成23年の東日本大震災と甚大な津波被害に見舞われてきた。

令和2年4月、国が「日本海溝・千島海溝沿いの巨大地震モデル」を公表したことを受け、青森県では令和3年に新たな津波浸水想定を設定。これを踏まえて、八戸市においても津波避難計画の見直しが行われたが、令和4年11月に公表された当該計画によると、江陽地区のほとんどが津波浸水想定区域となった。

##### イ 取組内容について

###### (ア) 江陽地域づくり会議（安全安心づくり部会）

東日本大震災後、江陽地区でも自主防災組織の必要性が叫ばれたことから、江陽地域づくり会議（安全安心づくり部会）で設立に向けた会議を何度も重ね、平成24年8月、江陽自主防災会を設立。同年は、市の補助金を活用して防災倉庫の設置や防災資機材の整備を進め、次年度の防災避難訓練に備えた。

###### (イ) 江陽自主防災避難訓練

地域住民はもとより、小学校や中学校、保育園のほか、老人福祉施設等に参加を呼びかけ、平成25年10月、江陽中学校を津波避難ビルとして江陽自主防災避難訓練を実施。地域住民など800名以上が参加し、命を守る行動の重要性を学んだ。

防災避難訓練を実施する際には、事前に公民館で会議を開催しており、訓練の目的や内容、当日の動きなどを共有しながら、毎年1回、10月初旬に地域を挙げて訓練を実施している。

避難訓練と同様に大事にしてきた取組に「防災セミナー」がある。公民館で開催される町内会や地域の諸団体の会合の機会を活用して行う防災講話、公民館講座として胸骨圧迫やAED講習を行う普通救命講習会、図上訓練、危険個所・避難経路の確認など、地域住民の防災力を高める活動に公民館が大いに役立っている。

##### ウ 「ウェルビーイング」に向けた成果について

「わの命は わが守る」ために、避難に対する意識変革が図られたことである。



(ア) 浸水区域からいち早く逃れて遠くへ避難

江陽地区への津波到達想定時間は約30分とされているため、津波到達想定時間より早めの避難行動を心がけ、防災情報の警戒レベル3「高齢者等避難」が発令された際には速やかに避難行動を開始すること。また、非常時持ち出し品や避難経路の確認を日頃から行うこと。



(イ) 避難ビルへの避難（学校、下水道事務所）

逃げ遅れた場合、一時避難場所に指定されている避難ビルのうち、どの施設に避難するか決めておくこと。

(ウ) 大型ショッピングセンターへの避難

令和5年11月、市とラピアの運営会社が、大津波警報発令時にラピアの店舗や立体駐車場を津波避難ビルとして使用する協定を締結。令和6年6月には、震度6の地震が早朝に発生したという想定で避難訓練を実施し、避難に必要な時間や開店前の入口等を確認。買物に訪れる施設が避難場所となり、住民に大きな安心感をもたらした。



## エ 今後の課題及び方向性について

(ア) 高齢化への対応

高齢化が進み、足腰に不安を抱える地域住民が増加している。長い距離・長い時間の徒歩による避難は、避難する気力も失せてしまう。ラピアのような高い建物を持つ事業所に対し、津波避難ビルとして垂直避難できるよう協力を呼び掛けていきたい。

(イ) 自主防災組織の活性化

江陽自主防災会も13年目に入り、スタッフの高齢化も進んでいるが、他の組織と同様に女性スタッフの不足が大きな課題であることから、防災士養成講座等を活用し、男女関係なく意識の高い人材の獲得を進めていきたい。また、「災害に強い地域づくり」は「自分の命を守る」ことにより進められると考えていることから、地域と学校を結び付けた防災活動も推進し、自分の命を守ることは周囲の命を守ることに繋がるという意識の向上を図っていきたい。

## (2) 「公民館のチカラ」でまちに元気と笑顔を！～岩手町中央公民館の挑戦～

岩手県岩手町中央公民館館長補佐 志田 順悦 氏

### ア 地域の現状について

岩手県内陸北部にある岩手町は、「北上川の源泉のまち」、「彫刻のあるまち」「ホッケーのまち」など多くの顔を持ち、100年の歴史を誇るキャベツをはじめとした全国有数の野菜総合産地で、郷土芸能が盛んなことでも広く知られている。しかし、多くの地方自治体と同じく人口減少と少子化が進行し、近年はコロナ禍の影響で地域行事や世代間交流の機会が減少するなど、町に元気と笑顔を取り戻す取組が求められている。

### イ 取組内容について

(ア) いわてまち里川キャンプ

町内屈指の自然環境に恵まれる南山形地区にあった南山形小学校は、子どもたちが学校帰りに川で水浴びをする絵に書いたような里川・里山の学校で、このような恵まれた地域資源と町の魅力を活用し、同地区の各種連絡協議会等の協力も得て、平成22年度から「いわてまち里川キャンプ」を開催。

令和4年度からは、近隣の市町やIGRいわて銀河鉄道沿線市町に募集範囲を拡大。参加受付の開始から15分で105名の定員に達する人気となり、大自然の中での体験活動や学区・市町を越えた交流ができる貴重な場として好評を得ている。

#### (イ) いわてモルックオープン大会

フィンランド発祥のニュースポーツ「モルック」に着目し、令和3年度からオープン大会を開催。ルールが簡単で、性別や年齢を問わず楽しめることから、地区行事にも取り入れられ町内の競技人口も急増している。年5回開催している本大会は、各回2チーム（約100名）が総当たりで優勝を争うもので、町外からも数多くのチームが参加。特産品を賞品とし、町の魅力もPRしている。個人の趣味や健康づくりだけでなく、交流人口の拡大、廃校の利用促進等、様々な面から地域の活性化が図られている。

#### (ウ) 盛岡さんさに出よう！

岩手県を代表する郷土芸能「盛岡さんさ踊り」を経験している住民が町内に潜在し、講座をきっかけに本番の祭りに参加することを見込み、「盛岡さんさを踊ろう！」を企画。町内の「野原さんさ踊り会」に講師を依頼し、令和6年3月に事業を開始したところ反響が大きく、初回10名だった参加者は回を重ねるごとに増加。これを受けて講師の団体が「第47回盛岡さんさ踊り」への出場を決意したことから、続編事業「盛岡さんさに出よう！」を企画。最終的に講師の団体と公民館事業参加者の総勢90名が、8/4に行われた盛岡さんさ踊りに初出場を果たした。



#### ウ 「ウェルビーイング」に向けた成果について

公民館事業をきっかけに、なりたい自分になろうと行動し始めた個人、個人が集う組織、組織が根ざす地域、地域を束ねる町全体が、同じ目標と意思を共有しながら、笑顔と達成感に満たされていく、その先にウェルビーイングがあるではないか。3つの事業は、個人から団体、地域、そして町へと有機的に広がっており、「やらなければならないから」ではなく「やりたいから」という参加者の意欲を原動力に今後も継続が見込まれる。

#### エ 今後の課題及び方向性について

公民館事業において、公民館や廃校等の施設は大切なツールであるが、私たちが持っている最も大切なツールは社会教育や公に対する「信用」であると考えている。足元にある地域の宝物、財産の価値を今一度確認し、施設や信用といったツールをどのように掛け合わせて住民に提供していくかが大事であろう。公民館がこれまで培ってきた人との繋がりや経験、社会教育施設の機能、地域資源の価値・可能性を存分に活用し、新しい視点で人の繋がりをつくり出し、一人ひとりの望みが叶い、たくさんの笑顔があふれる元気なまちを目指して挑戦し続けたい。

## 2 質疑応答

### (1) 江陽自主防災会の事例に対して

- ・今後の課題として「学校と地域の連携」も挙げられたが、現時点で学校は自主防災会にどのように位置づけられているか。また、今後の展望があれば伺いたい。

→中学校で防災避難訓練を実施した際、生徒たちからは「避難者の受け入れ訓練は初めてだったが、みんなの役に立つことができた」という感想が聞かれた。生徒には一人一役をお願いし、自主防災会のスタッフが指導して従事してもらったが、自分が役に立ったと感じてくれたことは何より嬉しかった。このような取組を通じて郷土愛が醸成され、やがては地域を担う人材となってほしい。

### (2) 岩手町中央公民館の事例に対して

- ・盛岡さんさ踊りへ参加する段階まで至ったのは、公民館だけの力だったのか。それとも、他の団体の関わりもあったのか伺いたい。

→本事業は、公民館が企画・運営したもの。盛岡さんさは町と無関係という意見もあったが、岩手県民である私たちと県を代表するさんさ踊りには十分な関わりがある。町の郷土芸能では不公平感が生じる恐れもあるため、さんさ踊りに着目した。

- ・キャンプの事業では若いスタッフも多く見受けられた。ボランティアスタッフであると見込んでいるが、町外からも参加しているのか伺いたい。

→採用2～3年目の若手職員が従事しており、研修の場になっている。大学生については、開催時期が試験期間と重なるため参加がかなわなかったが、地元の高校生がボランティアとして参加している。

## 3 グループ協議の主な内容

### (1) 2つの事例発表を聞いた感想

- ・社会教育側の熱意があるかどうか、前向きで引っ張っていく力が心強い。
- ・活性化したいからやる、やりたいからやる。
- ・継続する仕組みづくりが大事。
- ・廃校でのキャンプや中学校を避難所とした避難訓練を受け入れる体験をできたことが大事。
- ・職員が異動しても同じように取り組むことができるか。

### (2) 地元の社会教育施設の現状と課題

- ・地域人材の高齢化
- ・若い世代の利用が少ない
- ・施設の老朽化、建て替え要望
- ・地区館しかなく機能が乏しい
- ・事業のマンネリ化
- ・施設の使用方法に制限（掲示禁止等）

### (3) 社会教育施設に期待される今日的役割

- ・公民館は住民同士が交流できる事業を行い、地域交流の中心となる役割が期待される。

## 4 全体での共有化

9グループのうち、3グループから事例発表を聞いた感想や社会教育施設の現状と課題について発表があった。

### ◇Cグループ◇

- ・人口減少によって、公民館事業への参加者が少なくなっている。
- ・住民の意見を参考に事業を企画することはしていても、なかなかそこまで辿り着けず、毎年

同じような事業を繰り返しマンネリ化している。

- ・町内会や地域の関係団体からの依頼が多く、公民館の多忙化を招いている。事業のスクラップアンドビルドを行い、必要な事業とそうではない事業を見極める必要がある。
- ・地域住民に取組を伝えるために、積極的な情報発信が必要。

#### ◇Dグループ◇

##### 【ハード面】

- ・建て替えや改修等の対応ができていない自治体もあるかと思うが、多くの公民館で老朽化が進んでおり、使用者である地域住民から建て替え等の要望が上がっている。
- ・公民館から離れている地域においては、集会所がコミュニティ形成の機能を有しているため、公民館は講座に特化している場合があり集会所との棲み分けが難しい。

##### 【ソフト面】

- ・地域コミュニティの担い手である住民の高齢化が進み、次の世代をどのように育成していくか、発掘するかということが大きな課題である。
- ・公民館がない・遠い地域の住民に対して、「移動公民館」という形でサービスを提供しているケースがあるが、地域住民のニーズに合ったサービスを提供するために、地域のキーマンとの対話などを通じてニーズを把握することが必要である。

#### ◇Gグループ◇

- ・両事例とも、取組を引っ張る人、その引っ張り方が大変印象に残った。それぞれの地域の特色を生かした取組であったと思うが、必要性であったり、ニーズであったり、或いは元々地域が持っている資源をどのように活用していくかというところにとっても学びがあった。
- ・「やりたいことをやる」という言葉にとっても共感した。「やりたいことをやる」を進めることで連携が促され、継続する仕組みへと繋がっていくのだと勉強になった。



## 5 コーディネーターによるまとめ

今回の事例発表を聞いて、改めて感じたことが3つある。

1つめは、公民館等の社会教育施設をパワーアップさせていくときに、一番鍵になるものは人、職員だということである。グループワークの中で、施設の老朽化や制度的な課題も話題になったことと思うが、職員は、社会教育施設の機能を発揮するための心臓部であり、駆動力であり、どれだけ新しく充実した設備を有していたとしても、職員の存在がなければその機能を十分発揮することはできない。

だからこそ、職員が安心して、腰を落ち着けて働くことができる体制づくりをきちんと進める必要がある。会計年度任用職員の職員もいれば、指定管理者の職員として不安定な状況で働く職員もたくさんいる。今、安心して、腰を落ち着けて働くことができる体制をどのようにつくるかが問われている。

ご参加いただいている社会教育委員の皆さんには、その体制づくりのために声を上げ、体制づくりの背中を押していただきたいと思う。

2つめは、公民館等の社会教育施設の本来の機能は、地域住民が直面している地域課題に正面



から向き合い、応えていくということではないかということである。

住民自身が課題に向かって一歩踏み出し、チャレンジしていく、その歩みを支え応援していく。これこそが社会教育施設の大事な機能であり、この機能を力強く、たくましいものにしていかなければいけないと思っている。

そして、3つめは、そのためにも公民館職員、社会教育職員は何をするのかということである。私は、「地域住民のために」と力を入れるよりも、「地域住民と一緒に」という姿勢が問われているのではないかと考えている。

暮らしや地域がより楽しく、より豊かになっていく…、そのような「良きこと」を地域住民と一緒に思い描き、叶えていくようになると、社会教育施設はますます充実し、面白いものになっていくのではないか。そこに公民館職員、社会教育職員の仕事の面白さや醍醐味があると、今日改めて感じたところである。

計画や評価指標に縛られて肩に力を入れてばかりいるのではなく、「良きこと」を考えてトライする。トライしてみたことに対して良い反応が得られれば一層良くするために、反応が良くないときには改善策を考え、再度トライする。このようなサイクルをつくり出すと、公民館が元気になり、地域も変わり、そして、暮らしや地域の中にウェルビーイングが実現していくものと考ええる。

## 6 参加者の感想

- 有益な情報と事例を習得できた。
- つながりと地域の活性化を再確認した。
- グループワークが有効であった。
- ▲グループワークに課題があった。
- ▲情報発信の工夫が必要と感じたが具体的な例が不足していた。
- ▲公民館としての具体的な役割が見えづらかった。

※感想の詳細はアンケートのまとめに記載

### テーマ 健康や感動を生み出すスポーツ振興の推進

#### 1 事例発表の要点

##### (1) スポーツを通じた持続可能な地域づくり

NPO法人スポネット弘前理事長 鹿内 葵 氏

鹿内氏の取組は、ゼロから地域のスポーツクラブを立ち上げた経験を基にしたもので、地域住民と共に成長を遂げてきたクラブの経緯と現在の活動内容を紹介した。最初は小規模な活動からスタートし、地元の賛同者と共に着実に活動を拡大させてきた姿が紹介された。

クラブの運営方針は、スポーツを単なる競技としてではなく、地域住民が交流し、楽しみ、健康を保つための手段として捉えることにある。特に、高齢者と若年層の交流を積極的に進めることで、地域のウェルビーイング向上を目指している。

鹿内氏は、複数の公共施設（体育館や商業施設内のスペースなど）の管理も手がけており、それを活用した地域イベントやスポーツ教室を通じて、地域コミュニティの中心的な役割を担っている。これには、バスケットボールやバレーボール、登山教室など多様な活動が含まれている。

課題として挙げられたのは、部活動の地域移行による人材不足や資金調達の難しさだ。特に、放課後や休日に指導を行う人材の確保が難しい現状に対し、退職者や柔軟な勤務体制を取れる方々を積極的に活用する工夫がなされている。また、地域住民や企業の協力を得て資金を確保するため、指定管理料や委託事業、地元の協賛金の調達にも取り組んでいる。

鹿内氏は、地域の人々を引きつける魅力あるリーダーとしても評価されており、活動に共感を得やすい「理念」や「ビジョン」を掲げ、地域のつながりを深める活動を続けている。その活動理念は、地域の活性化とスポーツを通じた健康づくりであり、支援者の意識のまとめ方が参考になる。

##### ○ポイント

地域住民を巻き込むボランティア活動や多様な支援体制を通じてクラブの持続可能性を確保すること。

スポーツ活動を、競技志向ではなく「楽しむ場」として地域に浸透させる理念の推進。

複数の公共施設を活用した活動と資金調達の多様化に向けた取組。



##### (2) 学校連携から始める生涯スポーツの推進とウェルビーイングの向上

NPO法人なんでもエンジョイ面白クラブ 代表理事 武田 哲也 氏

武田氏は、地域の総合型スポーツクラブを運営しており、幅広い年齢層を対象にした多様なプログラムを展開している。クラブの目的は、地域の子どもから高齢者までがスポーツを通じて身体を動かし、地域コミュニティの形成に寄与することである。特に、スポーツを通じた世代間交流を重視し、地域社会の活性化を図っている。

具体的な活動としては、中学校の部活動支援を行い、地元中学校との連携によるスポーツ指

導を行っている。これにより、地域の子どもたちに安定したスポーツ環境を提供するだけでなく、指導者の育成も進めている。また、長年にわたる活動の中で、クラブの卒業生が成長し、新たな指導者として戻ってくる事例も紹介した。

武田氏は、少子高齢化や中学校の統廃合といった地域の課題に対応するため、地域全体の協力体制を築き、持続可能な運営を目指している。特に、昼間の指導者不足が課題として挙げられ、地域社会全体での連携が必要とされている。これに対し、クラブの長期的な運営を支えるため、次世代の指導者育成に力を注いでいる。

武田氏はまた、資金面での課題に対処するため、地域企業からの協賛金を募る「バックアップバンク」の仕組みを構築してクラブ活動に必要な資金を確保している。このシステムを通じて、地域内外の支援を得ながら、スポーツ活動を維持する取組を進めている。

今後の展望としては、地域内外の連携をさらに強化し、子どもたちに幅広いスポーツの選択肢を提供することを目指している。また、地域コミュニティ全体の活性化を図るために環境整備を進める意向も示された。

### ○ポイント

- ・ 中学校との連携を通じたスポーツ指導と世代間交流を重視する活動。
- ・ 地域課題に対応するための人材育成や協力体制の強化。
- ・ 資金面での持続可能な運営を支える独自の仕組みと地域内外との連携。



## 2 グループ協議の主な内容

### (1) 事例に対する質問

質問1：地域でのスポーツ活動において、地域のボランティアや保護者の方々がどのような役割を果たし、どのように活動を支えているのか。また、地域の参加者がどれだけ集まっているのかを教えてください。

回答1：(鹿内) 地域活動は、職員だけでなく一般会員や学生、社会人、退職者など、多様なバックグラウンドをもつ方々によって支えられている。活動の企画は一般会員の発案も多く、登山教室やスポーツ教室なども地域住民と連携しながら実施されている。地域主体の運営を目指しており、特に広い地域では更なる密着型の取組を推進している。



質問2：部活動の地域移行が進んでいる中で、退職した職員が地域活動を支える事例があるが、収入面での支援や持続可能な体制づくりにどのように取り組んでいるのか。資金

源や協賛金についても教えてほしい。

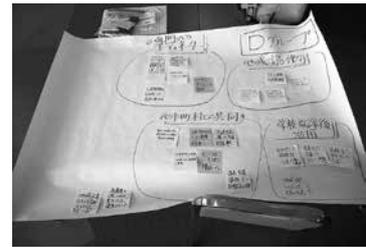
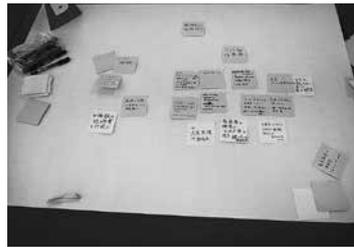
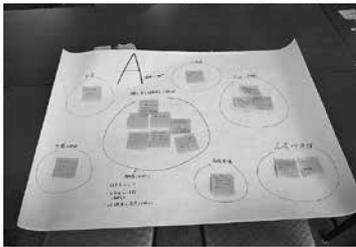
回答2：(鹿内) 収入源としては、指定管理料や委託事業、高齢者支援事業、協賛金など様々な形で収益を確保している。部活動の地域移行を支えるための人材確保も課題だが、柔軟な勤務体制や地域の資源を活用した活動を進めている。ドイツの教育現場の例も参考にしつつ、地域内外から人材を確保する工夫をしている。



質問3：地域資源の活用やネットワーク形成について、既存のスポーツ団体や行政との連携方法について具体的な事例を教えてほしい。

回答3：(武田) 気仙沼市のスポーツネットワークでは、既存のスポーツ団体を統合したプラットフォームを構築し、指導者やプログラムの共有化を進めている。行政とも密に連携し、地域課題を解決するための協力体制を整えている。一方で、自主的な姿勢も大事であり、課題を自ら引き出す取組も行っている。

## (2) 各事例の今後取り組むべき課題に関する意見・アイデア (概要画像)



## 3 全体での共有化

時間の都合上、3つのグループを選出し、成果物を披露しながら発表を行った。それぞれの発表内容は以下のとおりである。

### (1) グループ1：子どもたちの今後のスポーツおよび高齢者地域スポーツについて

#### ア 子どもたちのスポーツについて

##### (ア) 課題1：送迎

子どもたちのスポーツ活動を支えるためには、送迎の課題解決が必要であり、市や自治体の協力が重要であるとの意見が出された。

##### (イ) 課題2：指導者不足

指導者不足を解消するために、以下のようなアイデアが提案された。

- ・大学生との連携
- ・企業のフレックスタイム制度の活用
- ・スポーツ業界全体から週1回や月1回でも指導可能な人材を洗い出す。

また、指導者を「大会を目指すタイプ」と「趣味として楽しむタイプ」に分類し、適切な役割分担を行う必要があるとの意見も出された。



## イ 高齢者地域のスポーツについて

- ・地域資源の活用が課題として挙げられ、特に地域施設の自由な利用が制限されている現状が指摘された。
- ・移動手段の確保についても、市や自治体の協力が求められるとの意見が出された。
- ・地域リーダーの不在が課題となっており、町民運動会などの多世代交流やつながりを促進する集会の重要性が再認識された。特に公民館の活用が鍵になるとの意見があった。

## (2) グループ2：人口減少を見越した部活動やスポーツの地域移行について

### ア 専門コーディネーターの配置

- ・生涯学習課や公民館職員がコーディネーターとして適任であるとの意見が出た。また、若手の育成も必要とされた。

### イ 他市町村との連携による子どものスポーツ振興

- ・行政が交通手段を確保し、保護者の負担軽減を図ることが重要である。
- ・学校の放課後に体育館を活用し、異世代交流（昔遊びや伝統芸能の伝承など）を推進することで、地域と子どもたちの連携を強化する提案があった。



### ウ 若い世代の巻き込み

- ・若い保護者を活動に参加させるため、健康ポイントの付与や特典を設けるなどの工夫が提案された。

## (3) グループ3：地域移行に関する課題

### ア 指導者の確保

- ・地域人材の活用（退職者、教員、行政職員、部活動OBなど）を進めるべきとの意見が出された。
- ・スポーツクラブや企業に協力を依頼し企業のPR活動も兼ねた取組が提案された。

### イ 財源の確保

- ・会費制度の導入（通常会員、企業賛助会員など）が検討された。
- ・指導者への謝金支払いの必要性が議論され、特に専門的な指導や引率には対価が伴うべきとの意見が出た。
- ・国や県の補助金（例：放課後子ども教室）を活用する提案もあった。

### ウ 施設の確保

- ・廃校の体育館や特別教室（図工室、音楽室など）の活用が提案された。
- ・公民館を整理して廃校施設に集約するアイデアも出された。



## 4 市町村ごとの特色ある取り組み

- ・各市町村が特定のスポーツに注力する体制の構築（例：〇〇村は卓球、〇〇町は野球など）が提案された。ただし、その際には送迎支援などの課題解決が必要との指摘もあった。

## 5 コーディネーターによるまとめ

### (1) 共通する課題とキーワードの強調

2名の発表者の事例から共通して浮かび上がった課題は、人口減少・少子化、地域移行の課題、そしてスポーツの「二極化」だった。これらの課題に対処するためには、地域づくりやコミュニティづくりが重要な鍵となり、スポーツを行える環境の整備を通じて地域活性化を目指すことが共通テーマとして見られた。

### (2) スポーツを手段としたコミュニティづくり

発表者たちは、単なるスポーツの競技力向上ではなく、スポーツを通じて人々のつながりを築き、地域に元気と活気をもたらすことを目指していた。この理念に基づき、地域の住民が協力し合い、活動を広げていく姿勢が示された。活動を支えるのは「何のためにやるのか」という理念であり、スポーツを楽しむ場や高齢者を元気にする場など、地域のニーズに応じた取組が強調された。

### (3) ゼロからの成長と魅力的なリーダーシップ

鹿内氏がゼロから地域クラブを立ち上げ、共感を呼び、仲間を集めるプロセスが紹介された。発表者のもつリーダーシップの魅力や、人々を惹きつける力が地域の発展に寄与している点がすばらしい。活動の初期段階では、困難な状況に直面することも多いが、小さな一歩を積み重ねることで、徐々に地域の信頼を得て成長していく。

### (4) 地域性に根ざした自主的な取り組み

各地域の事情や人口規模に合わせて柔軟に取り組むことが重要であり、他の地域を模倣するのではなく、自分たちの地域の実情を見つめて何ができるかを考えることが求められる。人口減少や少子化は避けられない課題であるが、地域資源の活用や、多様な人々とのネットワークづくりを通じて地域の活性化を図る姿勢が評価できる。

### (5) 前向きなアプローチと楽しむ姿勢

事例発表の中で、「無理なく楽しく」という姿勢が取り上げられた。地域活動に取り組む中で、困難な状況に直面することも多いが、ポジティブに取り組み、楽しむことで活動の質が向上する。地域住民との関わりを深めつつ、関わるすべての人々がウェルビーイングを感じられる環境づくりを目指してほしい。



## 6 参加者の感想

- 学びが有意義だった。
- 交流・意見交換ができて良かった。
- 課題を共有できた。
- ▲解決策が見つからなかった。

※感想の詳細はアンケートのまとめに記載

### テーマ 郷土芸能の継承と文化活動の推進

#### 1 事例発表の要点

##### (1) 獅子踊りの伝承活動

青森県弘前市 鳥井野獅子踊保存会 会員 下田 雄次 氏

##### ア 鳥井野獅子踊りと活動の歩み

鳥井野獅子踊りは、江戸時代後期から弘前市の旧岩木地区に伝わる郷土芸能で、「一人立ち」と呼ばれるスタイルで行われ、三匹の獅子と一匹の猿で構成される。昭和30年代に人間関係のトラブルにより一時中断したが、昭和40年代に民俗芸能の価値を見直す流れが高まり、当時の公民館長や地域住民の尽力により復活を果たした。郷土芸能の復活は難しい面があるが、当時伝承者が1名健在しており、その方から地域の公民館事業のような形で継承を進めていった。だが継承は始まったもののなかなかメンバーが集まらず、地元の神社で披露するまで7年ほど要した。その後、公民館活動での継承から徐々に保存会としての活動に移行し、現在に至っている。



##### イ 現在の活動及び課題

獅子踊りの復活後は、後継者の育成を重視し、特に子どもたちに教える活動を数多く行ってきた。実際に教えた数は他団体に比べても多い方だと思う。ただ、小学校までは積極的に参加するが、中学校に入ると部活動等で忙しくなり、獅子踊りを続ける者が少なくなる。当時教えた子どもが、現在大人となって参加しているケースはほとんどなく、伝統芸能の継承がこのままでは途絶えてしまうのではという課題に直面している。現会員の活動開始のきっかけや参加の目的を見ても、地元出身で続けてきたという方もいるが、私も県外出身者で岩木山の麓で行われたイベントに参加したのがきっかけである。他には、Uターンで戻ってきて方が人間的なつながりを求めて入会したケース、最近では地域おこし協力隊の方が入会したケースもある。このような状況を考えると、継承していくためには学校教育との連携をどのように図っていくのかということを考えていく必要がある。

もう一つの問題として、少し語弊があるかもしれないが「獅子踊り自体のウェルビーイング」というのをずっと気にしている。西洋音楽や近代的な価値観が重視される中で獅子踊り独自の音楽や動きが軽視され、薄れてきているように感じる。学校の音楽は西洋音楽を基本に教えられ、子どもも大人も笛の音色をドレミの音階で表して覚えようとするが、日本の笛の音色はドレミの音階で正確に表すことができない。そのため、地域に根付く日本独特の音楽は昔のもので、素朴で、未熟な音楽という意識が芽生えてくる。本来は、日本の音楽には日本独自の歴史や特徴がありその土地で生まれたものであるが、その点が軽視されている。獅子踊りの姿勢にしても、腰を落とした姿勢やすり足は重視されず、一方で「気を付け、礼」などの近代作法をしっかりとやるべきという風潮が感じられる。伝統芸能が大切にしてきたことの理解を図り、どのように文化として継承していくかが大きな課題となっている。

## ウ 今後の方向性

伝統芸能の継承を主に学校教育との連携の視点から話してきたが、学校の取組だけでは限界がある。私の経験上、今後は、公民館や文化施設などの活動が、市民を巻き込んで問題を解決していく場になっていくと考えるため、地域と学校が郷土芸能の価値を共有し、こどもたちが伝統芸能に触れる機会を増やしていく必要があると考える。そして、何より活動に参加することのよさを感じてもらい、獅子踊りの場を人が集う場所にしていきたい。

## (2) 郷土芸能を通じた郷土愛の醸成と多世代交流の推進

上山市教育委員会生涯学習課 副主幹兼生涯学習係長 飯野 洋 氏

### ア 地域の現状

上山市は、雄大な蔵王連峰の麓に位置し、上山藩の城下町、羽州街道の宿場町、室町時代開湯の温泉町として歴史を刻み、古くから大勢の人、文化が往来している。

「田植踊り」は、東北独特の民俗行事で、農耕を営む人々が願って演じた呪術的な踊りが進化したものとして、上山市では江戸中期以降に各村々で演じられていた。その中で現在継承されているのが、金生地区の「金生田植踊り」である。戦争で一時中断したが昭和35年に復活し、同年5月に市の無形民俗文化財に指定された。

地元住民で構成された保存会があり、会員は男性22名、女性1名の計23名、年齢層は40代から70代である。毎月第1・第3土曜日に金生公民館で練習しているが、会員の高齢化と後継者不足の問題に直面している。

### イ 取組内容

上山市教育委員会は、児童に多様な学びを提供する安全・安心な居場所として平成2年度から放課後子ども教室を開設し、地域住民や各種団体と連携を図りながら大きく「体験交流」と「学習支援」の2つのテーマでプログラムを提供している。

体験プログラムの内容検討において、上山市教育委員会の方から保存会へ「金生田植踊りをこどもたちに指導していただけないか」と打診し、保存会では人材の育成を通して後継者不足の解消につながればという思いから受託を決め、地域の伝統芸能を体験させる取組が開始された。

当初は、保存会による口承での指導が中心だったが、口承での指導では児童にうまく伝わらないという課題が浮き彫りとなった。そこで、演舞を動画に撮影し、練習の際にスクリーンで動画を流しながら保存会の方も付いて指導したところ、演舞習得は一気に加速した。また、練習用の中太鼓などの道具をダンボールで手作りしたところ、児童は興味津々で、練習への意欲が高まった。さらに、児童が着用する陣羽織や長半纏を準備し、それらを着用することが児童の集中力やモチベーションのアップにもつながっている。現在も様々工夫を凝らしながら、活動を進めている。



### ウ 「ウェルビーイング」に向けた成果

放課後子ども教室をきっかけに、大人からこどもへの郷土芸能の伝承が始まった。初の試みであったが、保存会にとっても動画撮影を導入するなど、伝承の在り方を見直すよい機会

となった。結果として、保存会は次代を担うこどもたちに郷土芸能に触れる機会を定期的に提供することができ、こどもたちはふるさとへの理解をさらに深め、郷土愛と豊かな人間性を育むことにつながっている。併せて、郷土芸能の伝承を通じ、多世代交流が着実に促進し、希薄になりがちである地域コミュニティの絆が深まっているように感じる。

## エ 今後の課題及び方向性

放課後子ども教室において体験プログラムの提供を開始してから8年になるが、残念ながら保存会に入会した児童はいない。しかし、ふるさとには江戸時代から続く「金生田植踊り」という郷土芸能があること、そして地域住民で組織する保存会がその文化を大切に守り伝えていることを、児童はしっかりと認識している。郷土芸能の継承には様々な課題があるが、文化の継承において社会教育が果たす役割は大きいと考える。

### (3) 質疑応答

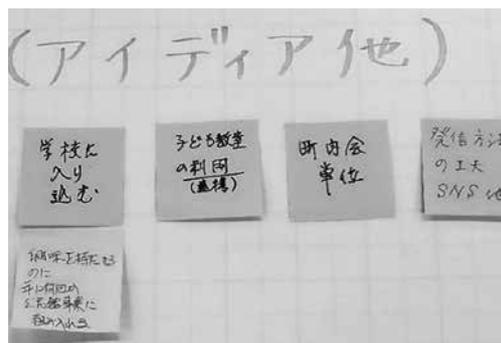
- ・各団体はだいたい何名くらいで活動しているのか。
- (下田) はっきりとした名簿はないが、登録されているメンバーはおそらく15人くらい。常時活動しているのは5、6人で、踊りや囃子に必要な8人が揃わない練習の状態が続いている。
- (飯野) 保存会には、男性22人、女性1人の計23人が入会している。
- ・津軽一円で100組近くの獅子舞の団体があると資料にあったが、現在の活動数はどの程度か。また行政等から運営費の補助はあるか。
- (下田) 全部把握はしていないが、周辺の活動状況から判断するとよくて半分程度だと思う。補助金については、弘前市では市民が企画した事業に助成金を出す「弘前市市民参加型まちづくり1%システム」というものがあり、2回ほど助成金をいただき、活動や衣装直しに活用したことがある。
- ・上山市の補助金は、無指定の団体にも支援しているのか。また、市全体での予算規模はどの程度か。発表にあった衣装や用具等の準備についても、国や県の補助金を使わずにすべて市の予算で賄ったのか。
- (飯野) 補助金2万円については、市としてすべての団体を把握しているわけではないが、2、3人で活動しているような団体には出していない。概ね市民の方が聞いたことがあるような5団体程度に出している。市の予算としては、放課後子ども教室全体で人件費等も含めて3,000万円程度で年間の事業を実施し、その一部を郷土芸能の伝承に充てている。衣装や用具等の費用については、年間2万円の補助金にプラスして、材料費等を別の補助金として加算して渡したと記憶している。
- ・上山市の放課後子ども教室に関して、呼称は様々あると思うが横手市では学童保育と呼んでおり、その呼び名が誤解を生んでいると個人的に感じている。上山市の放課後子ども教室が、学童保育の類のものに相当するか伺いたい。
- (飯野) 上山市の放課後子ども教室は、文部科学省が提唱する教育の一環として児童に様々な体験プログラムを提供する目的で行っており、厚生労働省の保育とは違うものと捉えている。子ども教室も学童保育も児童を対象としているため、市民から一緒にできないかという声もあり、今後検討していく必要があると感じている。呼称は各自治体の考え方で決めていくものであると考えている。

・上山市の放課後子ども教室のコーディネーターやサポーターは、どのような方で、誰が委嘱しているのか。

→ (飯野) コーディネーターは、市の方で雇い、専門的に行っていただく職員として生涯学習課の中に配置し通年で役割を担っていただいている。サポーターは、活動に興味がありやりたい方や、様々なプログラムの指導ができる方に随時お願いしている。サポーターは委嘱ではなく、コーディネーターを通じて依頼し、市から多少だが謝礼を支払っている。

## 2 グループ協議の主な内容

各事例の今後取り組むべき課題に関する意見、アイデア



- ◇各班の課題 (抜粋)
- ・後継者不足、会員数の減少
  - ・多世代交流が継承につながっていない
  - ・宗教と芸能文化の捉え方
  - ・行政の支援
  - ・社会教育委員等の関わり方 等

- ◇各班のアイデア (抜粋)
- ・発表の場の創出によるモチベーションアップ
  - ・学校の総合的な学習の時間の活用
  - ・新たな価値観での伝統芸能の見直し
  - ・積極的な女性の参加
  - ・地域学校協働活動の活用 等

## 3 全体での共有化

グループ発表

6グループのうち、3グループの発表があった。

◇Cグループ◇

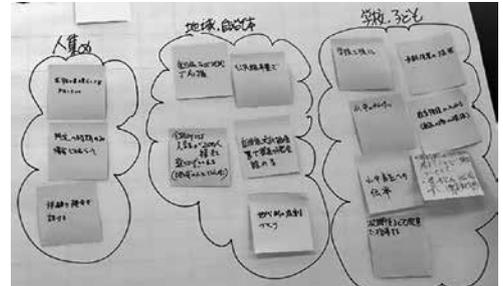
主な課題として、後継者不足、指導者、指導方法、発表の場が少ないことが上がり、特に後継者不足について解決策を考えた。まずは、子どもたちにおもしろいと思ってもらえるよう、地域の郷土芸能の成り立ちやどのように継承されてきたかなどの経緯や価値を見付け、全員で共有することが大切となる。また、地域の人へ発信する場を増やしていくため、学校や地域の行事を有効活用していく必要がある。ただ、学校の行事と地域の行事が重なることもあるので、例えば部活動として学校の中で少しでも郷土芸能に取り組んでもらい、学校と地域が連携した継承につなげてもらいたいと考えている。私の地域の学校では、月に1~2回、地元の保存会の方が学校を訪問し、郷土芸能について学ぶ学習が行われ、よい機会となっている。あとは、発表でもあったがDVD

- ・意味や価値を見つけ共有する。
- ・芸能祭や発表会など発信の場を有効活用。
- ・部活動内として実施する。
- ・言己金庫に残し、見て練習できるようにする。

などの記録に残しておくことで、いつでも見たいときに見て練習できるようになる。継承していく上で大事なことだと改めて思った。

#### ◇Eグループ◇

郷土芸能の継承は、「伝えなければなくなる」という認識に立って進めていく必要がある。伝えられる人がいなくなったらおしまいになるため、伝えられる人がいるうちに伝えなければならない。では、誰に伝えていくかを考えたとき、やはり子どもに伝えることが重要であり、そう考えると子どもが集まる学校が継承の拠点となる。



ただ、学校で伝えるとなるといろいろな壁が存在する。一つは、郷土芸能は地域ごとに誇りがあるため、外に出したがる。似たような郷土芸能でも地域により少しだけ違い、自分たちの地域のものという意識から、外に広げることに反対する声もある。もう一つは、学校を継承の拠点としても、先生方が郷土芸能を教えられない。これは先生方が悪いということではなく、やはり郷土芸能はその地域に根付いた文化であり、伝承を担えるのは地域の人しかいない。子どもたちは部活動の地域移行で、放課後や夏休み、冬休みの時間が空く可能性があり、そこはチャンスだと思っている。地域の方が地域の重要な役割の一つとして郷土芸能を伝えていくためには、ボランティアとしてではなく、行政による経費面の支援を受けて進めていくことも重要な点と考える。伝承ができなければ郷土愛を育むこともできない。地域づくりや社会教育の立場から、まずはそこをポイントとして取り組んでいかなければならないという意見にまとまった。

#### ◇Gグループ◇

2つの発表事例と現在取り組んでいる活動を照らし合わせ、グループで協議した。課題として大きいのは後継者の育成で、そこを「資金」と「事柄」の視点から考えた。「資金」では、補助金の活用も必要だが、行政に依存するだけでなくいろいろな面から自分たちで考えてみることも大切であると考えた。「事柄」では、地域としてはやはり住民の団結力を上げることや住民の意識を高めること、保存会と地域のつながりを強めることが大切であり、加えて、学校側からの地域への協力も必要になると思う。ただ学校側からどうですかと来ることは少ないと思うので、社会教育や行政の側から学校に働きかけていくことが必要だと考えた。



今後のアイデアとして、学校側の地域文化への理解が重要であり、そのためには社会教育委員や公民館活動をされている方々の役割がとても大切と考えている。資金面については、活動助成金を1つだけでなく、国や市などのものを調べ2つ、3つと活用する。地域の関係では、地域に発表の場を作り、活動したら発表をしてそれを褒め称えてもらう。そのことが活動の原動力になると思う。他にも、コンテストやフェスティバルの開催、地域だけでなく県内外へのアピール、学校の行事での発表なども考えられる。例えば町ぐるみのフェスティ

バルなどがあると、そこが成人した子どもたちが戻ってくる場となり、そのフィナーレでみんなで踊る。その時に生まれた思いは、伝統芸能の一番の土台になる。今後も、学社融合は欠かせない。保存・継承から、より進む「進化」、新しい意味での「新化」が必要ではという意見にまとまった。

#### 4 コーディネーターによるまとめ

発表の中に共通していたことだが、民俗や郷土芸能、伝統的な技術などの伝承は、毎年の繰り返しの中に存在している。毎年、あるいは数年ごとにそれを絶やさず、継続することに価値があり、それらの継承そのものを大切にすることが本質的に必要ではないかといつも思っている。地域の方々はそういう取組を継続し、地域の文化を発信してもらっている。ぜひ、そういう発信や、その価値を大事にすることを、みんなで取り組んでいかなければならない。

今回「場」にこだわりたいと思っていた。仲間たちが集う場やそういう場を提供する施設となると、社会教育の場や公民館活動というところが地域の拠点になると思う。そこで取組をなさっている皆さんに、継続して地域の拠点としての場づくりをよろしくお願いしたい。



#### 5 参加者の感想

- 情報・アイデアの共有と参考になった。
- 交流と対話が楽しかった。
- グループでの取り組みが良かった。
- ▲進行や時間管理を改善点すべき。
- ▲後継者の育成のため、課題が多い。

※感想の詳細はアンケートのまとめに記載

### テーマ 家庭・学校・地域の連携と協働の在り方

#### 1 事例発表の要点

##### (1) 鶴田町の地域学校協働活動

青森県鶴田町 地域学校協働活動推進員 沢田 真由美 氏

###### ア 地域の現状

鶴田町では、少子高齢化に伴う児童の減少により、6つあった小学校が1つに統合され、令和2年4月から新鶴田小学校として新たな学校教育がスタートした。中学校はもともと1校であったため、これにより小学校と中学校それぞれ1校となった。

令和6年度の小学校児童数は495人で、中学校の生徒数は262人だが、小・中学校共に、年々減少している。



###### イ 取組内容

これまで、各小学校においては放課後子ども教室を実施し、地域の指導員や講師を招いての学習や体験を開催してきたが、統合後も引き続き小学校の専用施設を会場に活動を継続している。このほか、令和2年度の統合小学校の開校に合わせて、地域と学校が連携して子どもたちの教育や学校を核とした地域づくりを目的に地域学校協働活動がスタートした。

主な活動内容として、小学校5学年の総合的な学習の時間を利用しての「野菜作り」、「リング作り」、「獅子舞体験」を行っている。また、地域の方を講師に1年間を通して 生育観察や収穫体験、郷土芸能の学習や踊り・囃子の体験学習を行っている。更に、令和5年度からは活動を中学校にも広げ、「ブドウ作り」や「各種職場体験」などを行っている。

###### ウ 「ウェルビーイング」に向けた成果

学校と中学校に1人ずつ常勤で配置されている推進員は、それぞれの活動において、講師や協力してくれる地域住民との交渉や連絡調整、学校との調整、バスの手配や必要物品の購入や準備などを担っており、学校の働き方改革にも一役買っている。

また、令和5年度から小学校と中学校が合同のコミュニティ・スクール（町として1つ）が整備されたことにより、より一層、地域と学校との連携が図られ、地域全体の連帯感が高まることが期待されている。

###### エ 今後の課題及び方向性

地域学校協働活動を始めて5年目を迎え、教員（学校）の理解が得られてきているが、まだ馴染めなかったり、価値観の違いをもったりしている教員がいるので、より細かな説明や協力をお願いを教育委員会とも相談しながら進めていきたい。

また、講師やボランティアに参加する地域住民の顔ぶれが同じだったり、高齢化や多忙により参加者の確保が難しかったりするので、広く公募するなど、広報活動にも力を入れて新しい人材を増やしながら活動の幅を広げていきたい。

## オ 事例に対する質問、事例発表者の回答

- ・総合的な学習の時間に地域の方を講師でお願いしようと思うと見つけるのが大変だと思うが、講師を見つける時の具体的な事例があれば教えてほしい。
- 講師については、スタートの段階では苦労はなかった。学校でやってきた取組をありのまま引き継いだ形だったので良かった。また、前任者の異動先が農業振興課で、農業体験についてはパイプ役になってもらいスムーズに連携できている。
- ・ボランティアが15名いるがどのようにして集めたのか、それ以外にもボランティアをやってくれる方をどのような方法で集めたのか教えてほしい。
- ボランティア募集の手紙を全家庭に配付している。得意なものや不得意なものがあるので、どのような手伝いができるのか記入する欄を作っている。また、PTA活動が長かったので、PTAの仲間に声を掛けたり、学童の支援員をやっていたときに協力してくれた保護者に声を掛けたりしている。
- ・沢田氏は推進員として小学校にいるが、どういう立場や身分（人件費を含む）でいるのか教えてほしい。
- 地域学校協働活動推進員という職名で勤務しており、文部科学省の補助対象（1日4時間の200日まで）となっている。また、放課後子ども教室の指導員の賃金と同じように、補助を受けながら勤務している。
- ・リード的な役割で推進員が引っ張っていくのが理想だと思うが、働き方改革という逆風や学校スリム化のジレンマの中で、困難をどのように克服してきたのか教えてほしい。
- 学校での人間関係には大変苦労した。先生方の理解を得るために、ボランティア活動の日が一目で分かる掲示物を作って意識付けを図ったり、学校のためになるようなことに普段から進んで行ったりするなど、働き方改革の一助になるように自分からアプローチしてきた。



## (2) 村全体・地域全体が学びの学校

### ～コミュニティ・スクール委員会と地域学校協働活動を通して～

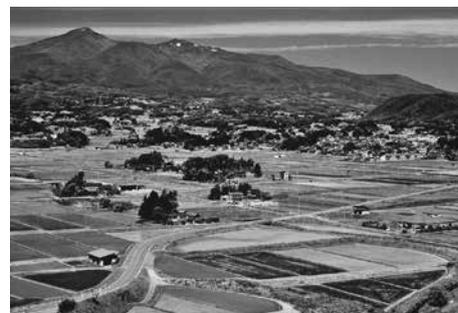
福島県大玉村教育委員会教育部生涯学習課 社会教育係長 田辺 将裕 氏

#### ア 地域の現状

福島県大玉村は中通り地区のほぼ中央に位置し、人口約8,900人の田園風景が広がる小さな村である。全国的に人口減少による過疎化が問題視されているが、本村は、昨年度に引き続き、今年度も県内の子どもの割合（15歳未満人口が県内一の14.7%で約1,300人）となり、教育環境や子育て支援が充実している。

歴史的には、ペルー共和国のマチュピチュ村の初代村長である野内 与吉氏の生誕の地として知られ、近年では、日本テレビ系の「鉄腕DASH」DASH村24度目の米作りなどでも取り上げられ、全国的に有名となった。

村内には幼稚園2園、小学校2校、中学校1校があり、高等学校以上の学校はない。ま



た、仕事面では村内に多くの事業所があるが、村外・県内外へ就職する若年層が多いことが現状である。「生まれ育った大玉村は、やっぱりいいなあ。将来的にまた大玉村へ戻って来たいなあ。」と思ってくれる子どもを育てたいと考えながら活動を行っている。

## イ 取組内容

大玉村の教育は、主に2つの事業から成り立っている。

**おおたま学園コミュニティ・スクール委員会（自転車の前輪：事業の方向性を示す）**

村内の幼小中の学校・園を一つの仮想学校「おおたま学園」とし、平成23年度におおたま学園コミュニティ・スクール委員会学校運営協議会を立ち上げ、学校（園）の学校運営方針の承認や各事業の実施案検討・準備等も行っている。

また、毎年各校・園で行われている学校関係者評価委員、地域学校協働活動事業の実施案検討等の地域教育協議会委員も同一委員で構成されている。

**大玉村地域学校協働本部（自転車の後輪：事業の推進力〔事業実施〕となる）**

平成21年度に大玉村学校支援地域本部（学校支援と放課後子ども教室）を立ち上げ、平成29年度より大玉村地域学校協働本部へ名称を変更した。協働活動・学習支援・家庭教育支援へと活動の幅を広めながら、子どもたちへ学びを提供している。

## ウ 「ウェルビーイング」に向けた成果

事業の一例として「おおたまふれあいフェスタ」があり、村という小さいスケールメリットを生かして、幼稚園・小学校・中学校の異学年交流事業「おおたまふれあいフェスタ」を毎年開催している。

子どもたちだけの交流だけではなく、保護者ボランティアや地域の各種団体（老人クラブ等）の協力も得ながら、子どもたちの豊かな学びを支援している。

参加した児童からは、「中学生の頼もしさを知った。道が分からなくなったときやほかの人が転んだとき、優しく声を掛けてくれた。私も中学生になったらそうなりたかった。」などの声や、ボランティアさんからは、「一緒に活動することが楽しい。子どもたちから元気もらえる。」などの声があるように、共に学び合う環境が整っている。

## エ 今後の課題及び方向性

「継続は力なり」という言葉のとおり、2・3年で結果につなげることは、なかなか難しいが、「おおたま未来塾」を例に挙げると、当時中学生だった参加者が、現在では講師（大学生）として子どもたちに教える立場になり、自分たちが学んできた姿を知っているからこそ、教える立場となっても分かりやすく丁寧に指導ができるという、連続したつながりになってきている。このつながりを大切に、学校・地域・家庭、そして村全体・地域全体が学びの学校となっていくものだとし、信じ、「みんなで支え、みんなで育て、みんなが育つ大玉の教育」を今後も実践していきたい。

## オ 事例に対する質問、事例発表者の回答

・ふれあいフェスタやコミュニティ広場は、募集型のイベントなのか、内容によっては学校行事として組み込まれているものもあるのか教えてほしい。

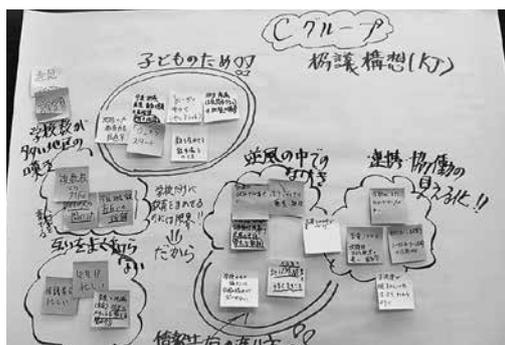
→ふれあいフェスタやコミュニティ広場は、主にコミュニティ・スクール委員が企画運営を

している。教育委員会も関わっているが、幼稚園・小学校・中学校を一つの仮想学園として事業を進めている。

- ・若い大学生が村の公営塾の講師として、教える立場となっているそうだが、既に戻ってきているのか、また、移住者が増えて子どもや子育て世代が増えているのか教えてほしい。
- 大学生になって教える立場になり、そういう姿が見えてきた段階だと感じている。実際に、子どもたちにアンケートをとっているが、「将来的に戻って来たいという気持ちがありますか」というアンケートでは、一昨年は78%、昨年は90%が「はい」と回答している。実際は外に出てしまうとなかなか戻ってこないというのが現状ではあるが、UターンなりIターンをしてもらえればという願いをもっている。
- ・ボランティアをLINE登録でという話があったが、登録の仕方は、学園全体としての登録なのか、それぞれの地域ごとの登録なのか教えてほしい。
- ボランティアの登録は村全体でやっており、学校支援ボランティアの方が約100名登録している。そのほか、子ども教室のボランティアの方が約20名登録している。
- ・大玉中のオープンスクールで、生徒が熟議へ入っているが、どの辺りの生徒が参加しているのか、また、先生方も参加しているのか教えてほしい。
- 大玉中のオープンスクールには、教職員が全員出席する。玉井小学校と玉井幼稚園では、先生方全員がコミュニティ・スクール委員会に出席する。中学校でやる場合、生徒会の役員やクラス委員（毎回生徒会の役員では大変なので）に熟議の班へ1人ずつ入ってもらっている。中学生からの意見は、感心させられるものが多い。
- ・大玉村は、今年度子どもの割合が県内一で、教育環境や子育て支援を大事にしているようだが、子どもの人口が増えている理由を教えてほしい。
- 実際、大玉村は子どもが増えているが、高齢者も多いので、人口的には微増していることになる。立地的にも国道4号線が近かったり、村の割には東北本線や高速道路が近かったりと、住みやすい環境であることが理由ではないかと考える。
- ・学校の校長先生、教頭先生、先生方が、何年か後のビジョンを見据えながら働いているのか教えてほしい。
- 実際のところ、先生方の負担が全くないわけではなく、ここまでの事業をやるには、先生方の協力がなくなかなか成り立たないのが現状である。全くやっていない学校から大玉村に転勤すると、かなり負担感はあると思う。ただ、目指すところは子どものためであるので、先生方にも協力をいただきながら事業を進めている。

## 2 グループ協議の主な内容

各事例の今後取り組むべき課題に関する意見、アイデア（概要画像）



### 3 全体での共有化

#### グループ発表

15グループのうち、1グループの発表があった。

#### ◇Jグループ◇

2つの事例から、自分たちの自治体にも共通する課題等を含めて話し合った。

まずは、つながりが薄れてきているということが課題として多く挙がり、学校の活動について関心がなくなっているのではないかとという課題が挙げられた。また、教職員が忙しさを理由に、地域とのつながりを管理職にお願いしている学校があるという課題や、コミュニティ・スクールの認知度が低いために組織が機能していないという課題も挙げられた。

これらの課題を解決するためのアイデアとして、人材は不足しているのではなく、見つけようとしていないのではないかとということから、社会教育士を育成し、社会教育に長けた人材を自治体が育てて、地域と学校をつなげていくのはどうかという考えを話し合った。また、人が入れ替わっても機能するように、「無理のない取組」や「負担のない取組」を考えることも大切であり、「変わらず揺るぎないものを確立する」ために、地域と共に人材を見つけていくことが必要なのではないかと話し合った。そのために一番大切なことは、お互いを知ることだと考え、「お互いを知り永いつながりを」というタイトルを付けた。



### 4 コーディネーターによるまとめ

学校と家庭と地域（プラス行政）が連携協働していくために大事なことは、共通理解をすることである。それぞれ立場が違い、役割も違う人たちが、同じ子どもたちを育てていくために共通理解しなければいけないことは、「何のために連携協働するか」ということである。互いのことを理解し合うために、コミュニケーションをとることが必要不可欠となってくる。

また、人材は不足しているわけではなく、見つけられないだけである。初めからコーディネーターができる人はいないので、育てる仕組みが必要となり、仕組みを作って予算化し、人材を育てることは教育委員会にしかできないことである。是非、行政の方々には、「市民を育てる、町民を育てる、村民を育てる」という思いをもって伴走支援をしてほしい。

学校の理解についてだが、地域の希薄化やコミュニティの希薄化、保護者の力が弱くなっていることを含めて、学校はとても大変な状態である。不登校（学校に行けないのではなく、学校に行かないという選択をしている子どもがいる）がかなり増えており、様々な配慮が必要な子どもたちも増えてきている。そのような状況を鑑みると、先生方は本当に日々大変な苦勞していると思う。

これらのことは学校だけで解決できる問題ではないからこそ、地域と一緒に子どもたちを一緒に育てていこうという機運をつくっていかなければならない。その中では、やはり話し合いが必要であり、みんなでコミュニケーションを取りながらお互いを知り、目的を理解し、みんなでのような子どもたちを育てていこうとするか、どのようなまちづくりにしたいのかを話し合っていかなければならない。

社会教育委員だからこそできること、公民館（公民館は人が集る人材の宝庫）だから果たせる



役割を感じていると思うが、それをどのように学校教育につなげていくのか、どのように学校と一緒に子どもたちを育てていく機運をつくっていくのか、社会教育委員としてどのようにバックアップできるのかということをそれぞれで考えていただきたい。

子どもたちに幸せになってもらいたいからこそ、子どもたちだけではなく、市民の皆さん、町民の皆さん、村民の皆さん、そして県民の皆さんが幸せになれる「みんなのウェルビーイング」をつくっていかうとする強い気持ちをそれぞれが持ち帰り、実践につなげていただきたい。

## 5 参加者の感想

○多くの学びを得ることができた。

○活発な意見交換ができた。

▲会場が狭く人数が多かった。

▲発表内容はわかるが、結局やるのは自分達、実際にやっていくのが悩みどころである。

※感想の詳細はアンケートのまとめに記載

# ■アンケートのまとめ

## 1 記念講演

### (1) 評価

大変よかった	よかった	ふつう	あまりよくなかった	よくなかった
152	51	6	3	1

### (2) 感想

#### ○ポジティブで元気をもらえた (20件)

- 終始明るく、笑顔の絶えない福士さんから良い、ポジティブなパワーをもらえた。
- 悩んでいることに前向きに挑戦する姿勢に感動した。
- 前向きでエネルギッシュな話が元気をくれた。
- 笑顔でいることの大切さに気づいた。
- 人生の豊かさにつながることを感じた。

#### ○講演の形式が良かった (15件)

- トークショー形式が良かった。
- アナウンサーとの対談形式で楽しく聞けた。
- 楽しいトークショーで元気をもらえた。

#### ○人柄・キャラクターが良かった (12件)

- 福士さんの人柄が良くて楽しかった。
- かざり気のない福士さんの話に好感を持った。
- 自然体の福士さんに親近感を持った。

#### ○スポーツ・健康への意識が高まった (7件)

- 強さと楽しさを両立した指導に感銘を受けた。
- 健康の重要性を再認識した。
- スポーツを通じての人とのつながりの大切さを感じた。

#### ○地域への期待が高まった (5件)

- 地域とのつながりを大切にすることが良かった。
- 青森や地元のためにも頑張りたい。

#### ▲話の内容や形式に対して不満がある。(5件)

- 半分は女性2人のおしゃべりであまり興味が持てなかった。

- 話のテーマが曖昧で、講演という形式に疑問を感じた。

▲聞きづらさ・環境に対して不満がある。(4件)

- マイクの音質が悪く、福土さんの声が聞きづらかった。

- 話すスピードが速すぎて聞くのが疲れた。

▲講演の適切性についての意見(3件)

- 今回の大会にはそぐわないと感じた。

- 大人向けではなく、小中学生向けの講演の方が適切だと思った。

## 2 分科会

### (1) 参加した分科会

第1分科会	第2分科会	第3分科会	第4分科会	第5分科会
65	54	27	29	89

### (2) 評 価

	大変よかった	よかった	ふつう	あまりよくなかった	よくなかった
第1分科会	25	17	1	0	1
第2分科会	29	14	0	0	0
第3分科会	11	8	1	0	0
第4分科会	23	7	1	0	0
第5分科会	49	15	3	0	0
合計	137	61	6	0	1

### (3) 感 想

#### 【第1分科会】

テーマ 豊かな学習機会に対応する社会教育の推進

○発表・講演の内容が良かった(7件)

- 発表者の話が興味深かった。

- 同じ課題を抱えていることが学べた。

- 新しい分野の知識が得られた。

- 各グループの意見が素晴らしかった。

- 豊かな学びの機会を創出するヒントが得られた。

- 多様な分野への連携が見えた。

- まとめが有意義だった。

○グループ討議・意見交換が良かった（4件）

- グループ討議が良かった。
- 他地域の課題や成功例を直接聞いた。
- 活発な意見交換ができた。
- 民・官両視点から学びがあった。

○影響・刺激を受けた。

▲内容の質・構成の問題があった（3件）

- 取りまとめの内容がありきたり。
- 発表内容が繰り返して参考にならなかった。
- グループワークが難しすぎる。

▲まとめにくい（3件）

- 自由発表とグループ討議がまとめにくかった。
- テーマが各自治体でバラバラ。
- グループの発表時間が少ない。

▲タイムスケジュールがわかりにくい。

▲時間が足りなかった。

## 【第2分科会】

テーマ 社会教育施設の機能の充実と活用の推進

○有益な情報と事例を習得できた（4件）

- 災害対策やまちの活性化について有意義な情報を得た。
- 貴重な事例を聞くことができ、他市町村の状況も知れて良かった。
- 公民館の信用を活用した講座の企画等に役立つ情報が得られた。
- 多様な立場の意見が参考になり、社会教育の重要性が理解できた。

○つながりと地域の活性化を再確認した（2件）

- 同じ課題を共有していることに気づき、住民や職員のつながりの大切さが再認識された。
- 人と人とのつながりの大切さが再確認された。

○グループワークが有効であった（2件）

- グループワークでの意見交換が活発で参考になった。
- 公民館のあり方や地域とのつながりについての気づきが多かった。

- ▲グループワークに課題があった（2件）
  - －グループワークが想定外でスムーズに進まなかった。
  - －講演会だけを想定していた人が多く、負荷が高かった。
  
- ▲情報発信の工夫が必要と感じたが具体的な例が不足していた。
  
- ▲公民館としての具体的な役割が見えづらかった。

### 【第3分科会】

テーマ 健康や感動を生み出すスポーツ振興の推進

- 学びが有意義だった（3件）
  - －大変勉強になった。
  - －グループ協議が有意義だった。
  - －事例発表が楽しかった。
  
- 交流・意見交換ができて良かった（2件）
  - －他県の方と意見交換できて良かった。
  - －他市町村の方と交流できた。
  
- 課題を共有できた。（2件）
  - －課題を共有でき、地域で取り組めるか検討したい。
  - －地域指導者不足について話し合えた。
  
- ▲解決策が見つからなかった。

### 【第4分科会】

テーマ 郷土芸能の継承と文化活動の推進

- 情報・アイデアの共有と参考になった（16件）
  - －他県の方のお話が大変参考になった。
  - －発表者の苦勞がよく分かり、活動を継続しているのだと思いがんばろうと思った。
  - －各自治体の取り組みを踏まえつつ、課題の再確認と意見・アイデアを共有できて良かった。
  - －少子高齢社会の問題に対する工夫と努力に感動し学びを得た。
  - －参加者全員で話し合いができて大変良かった。
  
- 交流と対話が楽しかった（4件）
  - －久しぶりに対面での交流が良かった。
  - －東北各地の様子をうかがい交流できて楽しかった。
  - －最高だった。

-いろいろな話が聞けて良かった。

○グループでの取り組みが良かった（4件）

- 皆さんが一生懸命取り組んでいて新鮮で素晴らしい時間だった。
- 郷土芸能をすたれさせないための取り組みを真剣に考えていた。
- グループにより課題と解決策とアイデアを出し合い、社会教育委員の役割の大切さを再認識した。
- 郷土芸能継承と文化活動の推進。

▲進行や時間管理を改善すべき（2件）

- 進行はもっと流れを明確にすべき。
- グループでの発表に時間をかけ過ぎたかもしれない。

▲後継者の育成のため、課題が多い。

**【第5分科会】**

テーマ 家庭・学校・地域の連携と協働の在り方

○多くの学びを得ることができた（7件）

- とても学びの多い時間になりました。
- 学びになった。他市町村での活動、思いが良くわかりました。
- 多くの地域で悩みながら進めているテーマだと思いました。
- 共通理解、飲みにケーション、コロナからの立直り。
- 学びが多かったです。
- 新しい学びがあるということは良いことだと思います。
- 具体的な話ができ学びが多かったです。

○活発な意見交換ができた（5件）

- 多くの意見をきけてよかったです。
- すばらしい雰囲気の中、多くの意見をきけてよかったです。
- とても良かった！
- 良いアイデアをいただきました。
- 活発に意見交換できた。

▲会場が狭く人数が多かった（3件）

- 会場が狭く会話が聞き取れないことが多かった。
- 時間が足りなかった。
- 人数が多いせいか時間が足りなかった。

▲発表内容はわかるが、結局やるのは自分達、実際にどのようにやっていくのかが悩みどころ

ろである。

### 3 今大会の様子や雰囲気、運営方法などに対する意見・感想

○大会の運営と雰囲気が良かった（17件）

- 大会が有意義であった。
- 運営がスムーズだった。

○スタッフ、運営者や講師への感謝と高評価（5件）

- スタッフの活動が素晴らしい。
- 鈴木連合会長の話が興味深かった。

○アトラクションについて高評価（4件）

- 三味線の演奏が素晴らしかった。
- アトラクションが興味深かった。

○参加者の交流や学びが良かった（4件）

- 参加者同士の交流が有意義であった。
- 他地域の参加者との情報交換会が良かった。

▲運営や施設に対する不満（5件）

- 駐車場が遠かった。
- 会場の案内がわかりづらかった。
- スライドが見にくい。
- カメラマンが邪魔。

▲式典が形式的であった。

## ■各種一覽

### 大会役員

役 職	所 属 ・ 職 名	氏 名
顧 問	公益社団法人全国公民館連合会会長	中 西 彰
	一般社団法人全国社会教育委員連合会会長	鈴 木 眞 理
大会長	東北地区社会教育委員連絡協議会会長 (青森県社会教育委員連絡協議会会長)	白 川 喜代美
副会長	東北地区公民館連絡協議会会長 (青森県公民館連絡協議会会長)	高 橋 宣 子
	岩手県社会教育連絡協議会会長	大 橋 清 司
	岩手県社会教育連絡協議会副会長	小 綿 久 徳
役 員	秋田県社会教育委員連絡協議会会長	加 藤 寿 一
	山形県社会教育連絡協議会会長	安 藤 耕 己
	宮城県社会教育委員連絡協議会会長	菅 原 敏 元
	福島県市町村社会教育委員連絡協議会会長	猪 股 純 一
	秋田県公民館連合会会長	湊 和 樹
	山形県社会教育連絡協議会顧問	熊 澤 義 也
	宮城県公民館連絡協議会会長	武 者 元 子
	福島県公民館連絡協議会会長	松 本 美 紀
	青森県社会教育委員連絡協議会副会長	越 村 康 英
	青森県社会教育委員連絡協議会副会長	岩清水 秀 一
	青森県社会教育委員連絡協議会副会長	根 城 隆 幸
	青森県公民館連絡協議会副会長	中 川 元 伸
	青森県公民館連絡協議会副会長	阿 部 崇

## 大会実行委員会委員

役 職	所 属 ・ 職 名	氏 名
委 員 長	青森県社会教育委員連絡協議会会長	白 川 喜代美
副 委 員 長	青森県公民館連絡協議会会長 (八戸市教育委員会社会教育課課長)	高 橋 宣 子
	青森県社会教育委員連絡協議会副会長	岩清水 秀 一
監 事	青森県公民館連絡協議会副会長 (青森市中央市民センター館長)	阿 部 崇
	青森県社会教育委員連絡協議会監事	大 西 勇 雄
委 員	青森県公民館連絡協議会監事	葛 西 隆 志
	青森県社会教育委員連絡協議会理事	最 上 一
	青森県社会教育委員連絡協議会理事	駒 井 昭 雄
	青森県社会教育委員連絡協議会理事	前 田 智 子
	青森県公民館連絡協議会副会長	中 川 元 伸
	青森県公民館連絡協議会理事	櫻 井 忍
事 務 局 長	青森県公民館連絡協議会理事	古 郡 友 哉
	青森県社会教育委員連絡協議会事務局長 (青森県教育庁生涯学習課長)	小 館 孝 浩
事務局次長	青森県社会教育委員連絡協議会事務局次長 (青森県教育庁生涯学習課学校地域連携推進監・課長代理)	西 塚 努
事 務 局	青森県社会教育委員連絡協議会出納員 (青森県教育庁生涯学習課企画振興グループマネージャー)	工 藤 奈保子
	青森県社会教育委員連絡協議会事務局員 (青森県教育庁生涯学習課企画振興グループサブマネージャー)	北 澤 茂
	青森県社会教育委員連絡協議会事務局員 (青森県教育庁生涯学習課社会教育主事)	今 敦 子
	青森県社会教育委員連絡協議会事務局員 (青森県教育庁生涯学習課社会教育主事)	松 橋 正 士
	青森県社会教育委員連絡協議会会計員 (青森県教育庁生涯学習課主事)	木 村 洸 子
	青森県公民館連絡協議会事務局員 (八戸市教育委員会社会教育課副参事)	佐 藤 しのぶ
	青森県教育庁東青教育事務所主任社会教育主事	花 田 一 仁
	青森県教育庁西北教育事務所社会教育主事兼指導主事	奈 良 学
	青森県教育庁中南教育事務所主任社会教育主事	秋 谷 啓 児
	青森県教育庁上北教育事務所主任社会教育主事	千 曳 健 二
	青森県教育庁下北教育事務所主任社会教育主事	藤 田 幸 博
	青森県教育庁三八教育事務所主任社会教育主事	若 林 保

## 受賞者名簿

### 公益社団法人全国公民館連合会表彰受賞者

#### ○優良職員

No	県名	氏名	所属
1	青森県	高橋 倭理子	六戸町中央公民館

#### ○永年勤続職員

No	県名	氏名	所属
1	青森県	高村 美 範	青森市中央市民センター岩渡分館
2	青森県	玉熊 義 廣	青森市中央市民センター左堰分館
3	青森県	倉本 則 子	青森市中央市民センター小柳分館
4	青森県	藤田 正 三	青森市中央市民センター駒込分館
5	青森県	齊藤 勝	青森市中央市民センター高田分館
6	青森県	金田 公 隆	弘前市立新和公民館
7	青森県	藤田 純 子	弘前市立藤代公民館
8	青森県	下斗米 友理子	八戸市立館公民館
9	青森県	和山 淑 子	八戸市立三八城公民館
10	青森県	留目 樹 子	八戸市立小中野公民館
11	青森県	田中 智恵子	八戸市農村環境改善センター瑞豊館
12	青森県	元木 ゆかり	八戸市立南郷公民館
13	宮城県	大沼 善 昭	大衡村公民館
14	宮城県	五十嵐 まゆみ	仙台市柏木市民センター
15	宮城県	千葉 亜紀子	仙台市中田市民センター
16	宮城県	大野 律 子	仙台市八木山市民センター
17	秋田県	菅原 慎 司	由利本荘市中央公民館
18	秋田県	阿部 明 人	鹿角市八幡平市民センター
19	山形県	渋谷 孝 行	寒河江市中央公民館
20	山形県	大沼 貴	寒河江市柴橋地区公民館
21	山形県	荒井 悠	川西町犬川地区交流センター
22	山形県	齋藤 耕 紀	鶴岡市藤島地区地域活動センター
23	山形県	佐藤 真理子	鶴岡市藤島地区地域活動センター
24	山形県	渋谷 正 士	鶴岡市八栄島地区地域活動センター
25	福島県	村野井 義 孝	福島市杉妻学習センター
26	福島県	桑田 光 江	郡山市富田東地域公民館
27	福島県	渡邊 純 子	郡山市大槻公民館
28	福島県	後藤 裕 子	郡山市大槻東地域公民館
29	福島県	菊地 久仁子	郡山市安積公民館安積分室
30	福島県	藤田 直 一	棚倉町文化センター
31	福島県	渡邊 和 昌	いわき市立中央公民館

## 東北地区公民館連絡協議会功労者表彰受賞者

### ○優良職員

No	県名	氏名	所属
1	岩手県	遠野健一	前釜石市立栗橋公民館

## 東北地区社会委員連絡協議会表彰受賞者

No	県名	市町村	氏名
1	青森県	五所川原市	外崎 れい子
2	青森県	つがる市	西谷 須磨子
3	青森県	鱒ヶ沢町	鎌田 守
4	青森県	板柳町	金澤 美知子
5	青森県	野辺地町	前田 智子
6	青森県	横浜町	鈴木 賀暢
7	青森県	横浜町	竹田 礼子
8	青森県	大間町	佐々木 純六
9	青森県	佐井村	岩清水 秀一
10	青森県	五戸町	金澤 和子
11	青森県	五戸町	村上 悟
12	青森県	南部町	馬場 徳夫
13	岩手県	八幡平市	伊藤 政子
14	岩手県	八幡平市	田村 美知子
15	岩手県	久慈市	村田 東助
16	岩手県	久慈市	松本 和憲
17	岩手県	二戸市	滝川 厚子
18	宮城県	登米市	三上 末男
19	宮城県	七ヶ宿町	今野 誠
20	宮城県	丸森町	佐藤 勉
21	宮城県	石巻市	伊藤 桂子

No	県名	市町村	氏名
22	宮城県	塩竈市	今野 吉晃
23	宮城県	気仙沼市	小野寺 雅之
24	秋田県	小坂町	安保 明
25	秋田県	三種町	近藤 和雄
26	秋田県	八郎潟町	谷村 正武
27	秋田県	由利本荘市	柏原 正人
28	秋田県	東成瀬村	佐々木 悦男
29	秋田県	東成瀬村	谷藤 ユミ子
30	山形県	尾花沢市	永登 一明
31	山形県	新庄市	齋藤 彰
32	山形県	真室川町	山田 美喜子
33	山形県	白鷹町	大村 亨夫
34	山形県	遊佐町	服部 正規
35	福島県	国見町	佐藤 清二
36	福島県	郡山市	國分 球子
37	福島県	矢吹町	渡邊 貞子
38	福島県	喜多方市	遠藤 幸一郎
39	福島県	相馬市	武島 昭良
40	福島県	いわき市	塩 陽子
41	福島県	いわき市	神山 敬章

## 青森県社会教育委員連絡協議会表彰受賞者

No	市町村	氏名
1	外ヶ浜町	五十嵐 和則
2	外ヶ浜町	福士 栄一
3	板柳町	三戸 康正
4	鶴田町	笹森 典子
5	弘前市	成田 むつ子
6	七戸町	附田 昌久

No	市町村	氏名
7	むつ市	竹園 正敏
8	むつ市	片谷 紀子
9	むつ市	松岡 敦子
10	東通村	田中 隆
11	佐井村	坪井 敏明
12	南部町	安ヶ平 敦志

## 協賛企業・団体等一覧

### <企業・団体>

電源開発株式会社  
焼きそば麺広  
東北電力株式会社青森支店  
東青地区社会教育委員連絡協議会  
青森商工会議所  
株式会社カネモト  
中南地方社会教育委員連絡協議会  
社会福祉法人緑風会  
株式会社箱田住宅工業  
株式会社伊藤鋳業  
株式会社福島組  
西北地区社会教育委員連絡協議会  
有限会社白神山美水館  
青森アップルジュウス  
つがる地球村  
ホテルグランメール山海荘  
株式会社山口水道建設  
横浜町社会教育委員  
大西ハーブ園  
上北地方社会教育委員連絡協議会  
リサイクル燃料貯蔵株式会社  
東京電力ホールディングス株式会社青森事業本部  
三八五交通株式会社  
株式会社アート&コミュニティ  
株式会社デーリー東北新聞社  
八戸市社会教育委員  
八戸市立公民館館長会  
八戸市水産科学館マリエント  
学校法人光星学院  
三八社会教育委員連絡協議会  
青森コロニー印刷  
GIANTS BARBERSHOP  
株式会社 JTB 青森支店  
株式会社今長仕出しセンター  
社会福祉法人柏友会

川嶋新聞店  
つがる市農産物直売所  
鱒ヶ沢町社会教育委員  
株式会社コメイチ  
儒童寺  
学校法人八戸工業大学  
新郷村教育振興協議会  
一般財団法人 VISIT はちのへ  
有限会社安忠商事トップワーカーズ  
一般財団法人ブナの里白神公社  
一般社団法人心酔  
公益財団法人全国公民館連合会

### <個人等>

久保勝廣（六ヶ所村社会教育委員）  
天間田鶴子（七戸町）  
東通村社会教育委員  
風間浦村社会教育委員  
佐井村社会教育委員  
むつ市社会教育委員  
下北地区社会教育委員連絡協議会  
箭根森八幡宮

## 大会参加者数

	参加者数	第1分科会	第2分科会	第3分科会	第4分科会	第5分科会
青森県	243人	35人	24人	20人	22人	61人
岩手県	42人	10人	10人	3人	6人	9人
宮城県	16人	4人	3人	1人	3人	3人
秋田県	56人	10人	7人	-	5人	4人
山形県	8人	2人	1人	1人	1人	1人
福島県	32人	3人	7人	4人	5人	11人
東北以外の県	3人	1人	2人	-	-	-
小計	400人	65人	54人	29人	42人	89人
大会関係者	88人	-	-	-	-	-
合計	488人	65人	54人	29人	42人	89人

**第46回全国公民館研究集会  
令和6年度東北地区社会教育研究大会  
第69回東北地区公民館大会  
第54回青森県社会教育研究大会  
報 告 書**

令和7年2月17日 発行

編集発行：第46回全国公民館研究集会  
令和6年度東北地区社会教育研究大会  
第69回東北地区公民館大会実行委員会  
〒030-8540 青森市長島一丁目1番1号

印刷：青森コロニー印刷  
〒030-0943 青森市幸畑字松元62-3



2024年度 (2024年5月1日午後4時~2025年5月1日午後4時)

# 公民館総合補償制度

本制度は、公益社団法人全国公民館連合会(全公連)の制度です。市町村の公民館および自治公民館、また公民館に準ずるものとして全公連が加入を認めたその他の施設等は、名称を問わずご加入いただけます。指定管理者制度を導入された施設もご加入いただけます。

## 3つの補償で公民館活動をサポート

### 1. 行事傷害補償

【災害補償保険(公民館災害補償特約、熱中症危険補償特約)+見舞金制度】

#### 保険

- 公民館行事参加者のケガを補償
- 公民館利用者のケガを補償
- 行事往復途上のケガを補償
- 行事の事前練習や事前準備、後片付けでのケガを補償
- 食中毒や熱中症を補償

#### 見舞金制度

- 疾病や特定傷害に、疾病死亡弔慰金、疾病入院見舞金をお支払いします。
- 特定災害による損害に、特定災害見舞金をお支払いします。

#### 【補償例】



- バレーボール大会参加者が転倒して負傷。

### 2. 賠償責任補償

【賠償責任保険(施設所有管理者特約、昇降機特約)】

#### 保険

- 公民館の施設・設備等\*の欠陥や業務運営のミスにより、第三者にケガをさせたり、財物を損壊したことにより、公民館が法律上の賠償責任を負担しなければならない場合に補償

\*公民館が所有、使用または管理する財物への賠償事故などは対象になりません。

\*施設にある昇降機(エレベーター、エスカレーター)の所有、使用、管理に起因する賠償責任も含まれます。

#### 【補償例】



- テントの張り方が悪く風で飛ばされ、行事来場者の車を破損。

### 3. 職員災害補償

【傷害総合保険[就業中のみの危険補償特約、入院保険金支払限度日数変更特約(支払限度日数180日)]+見舞金制度】

#### 保険

- 公民館事業や業務に携わる方の公民館業務中のケガを補償

#### 見舞金制度

- 公民館事業や業務に携わる方の病気や特定傷害、業務外のケガ、業務中の地震によるケガに死亡弔慰金や入院見舞金をお支払いします。

#### 【補償例】



- 職員が業務中に脚立から転落して負傷。

## 公民館総合補償制度の特長

### (1) 補償範囲や対象者が広い、公民館専用の制度です。

- 全公連が運営する「見舞金制度」に「保険」を組み合わせた公民館や類似公民館の専用の制度で、安心して公民館活動を行っていただけるよう幅広い補償になっています。

#### ★行事傷害補償制度のここがおすすめ★

- 日本国内であれば行事の場所は問いません。 ※別に定める危険な運動中等は対象外です。
- 行事参加者や利用者の居住地は問いません。
- 公民館公認のサークル活動参加者や有償・無償を問わず公民館ボランティアや講師も補償します。
- 公民館が他の団体等の行事に派遣する行事の参加者も補償します。
- 宿泊を伴う行事も対象です。

### (2) 年1回の手続きで安心です。

- 年1回の手続きで年間の主催、共催行事が対象になり、個別の行事の通知は不要です。うっかりして保険の手配を忘れる心配がありません。

### (3) 掛金の割引制度もあります。

- 同一市町村内で10館以上まとめて加入されると、行事傷害補償制度掛金に割引が適用できます。
- 職員災害補償の保険料には、団体割引25%、過去の損害率による割引15%を適用しています。

このご案内は、本制度の概要を説明したものです。詳しい内容につきましては「2024年度版マニュアル 公民館総合補償制度の手引き」をご覧ください。また、本制度全般のお問い合わせ、資料請求等は、エコー総合補償サービスまたは損保ジャパンまでお寄せください。

■引受保険会社  
**損害保険ジャパン株式会社**  
 公務文教営業部 文教室  
 〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1  
 TEL 03-3349-4679 FAX 03-3348-0238  
 (受付時間:平日9:00~17:00)

■取扱代理店(お問い合わせ・資料請求先)  
**エコー総合補償サービス株式会社**  
 〒101-0047 東京都千代田区内神田2-6-9  
**TEL : 0120-636-717**(通話料無料)  
**FAX : 0120-226-916**(通話料無料)